

515

39

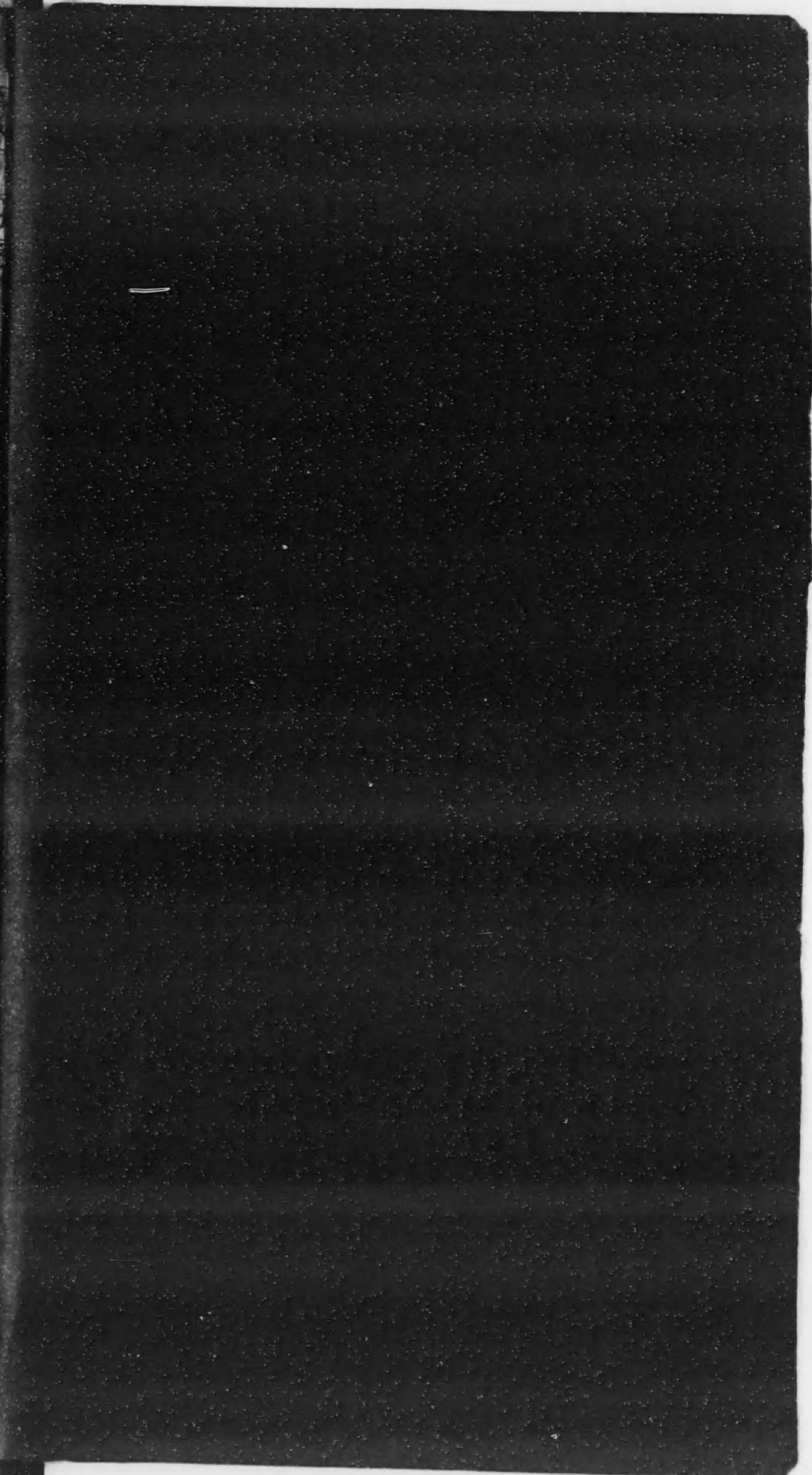
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



51
39

観愛戀の予



575-39



中桐確太郎著

予の戀愛觀

文藝哲學講座
第三輯

大正
12. 3. 19
内交

發行所

東京京橋

會社

小西書店

此小篇を讀んでくださる方に

□

この小篇は、舊臘、文藝哲學講座に於いて致しましたる三時間許りの、私の講演を、新に筆録したものであります。實は一月初旬までにまとめるつもりでありましたのを、なにくれの事情で遅らしました。然るに私の講演として語り傳へられてをるのを聞いたり、または私の名を以て雑誌などに掲げられてあるのを見ますと、私の申述べた所とは、大分異つてをりますので、私も困りますし、また他の方々にも御迷惑をかくることにもなるのでありますから、それ等の御ことわりかたなく、大急ぎで執筆いたしましたのが、小西さんも御同情下

され、種々の御不便を忍びて、特に公刊して下さることになりました。何もかも私の怠慢より出でましたことで、まことに相すまぬことゝ存じてをります。

□

私の戀愛觀は斷片的には、いろ／＼の機會に於て、申述べたこともありますが、とにかく一まとめに致しましたのは、此度が始めであります。まとめて見ますれば、これまで氣つかなかつた缺點も尠なからず露出してまゐりました。それ等の氣つきました點は筆録の際に、できるだけ修正を加へました。また口にて申上げます場合と、筆にてしるします場合とは、引例挿話なども、多少趣きを異にせねばなりませんので、此たび或は省略し、或は増加いたしました處もございませぬ。然るべく御諒恕たまはらんことを、當日の講座に出席せられた方々に御願ひいたします。

□

まとめたと申しましたが、三四時間位の講演といふ程度に致しましたのと、また右申しましたやうな事情で取急ぎましたのとで、申し遣した點も尠なからずございませぬ。殊に戀愛觀の諸相の中に、分類して掲げました方々の外に、立派なる思想家を、なほ數へ上ぐるこのできるのは申すまでもありませんが、私の存じてをります限りでは、三種の分類のいづれかに入るものゝやうにも記憶してをりましたのと、時間の制限もございましたので、成るべく最近に著されましたものを代表的に擧ぐることに止めました。しかしなほ私の思ひ及ばずして取落したのもあるかも知れませぬ。これ等の不備の點につきては、他日の補訂に於いて御わび申上ぐることゝ致します。但し私の戀愛觀の要點は大概申述べたつもりでございませぬが、もと／＼體驗や思索の貧弱なる所からして、

間違つた點も必ずあることゝ存じます。どうぞ十分の御批正を下さいまして、方今大いに亂れてをります戀愛に關する思想の整理に資することが出來ますやう大方諸賢に御願ひ申上ぐる次第であります。

大正十二年紀元節の夜

勿限莊にて

中 桐 確 太 郎

予の戀愛觀 目次

緒 言……………一

前 篇 戀愛觀の諸相

講述の由來——私の態度

ブラトーン……………四

シヨペンハウエル……………一二

現代の戀愛觀……………一六

パーソナル・ラヴ

性欲醇化説……………一七

田中玉堂氏——倉田百三氏

靈肉一致説……………二五

本間久雄氏・島村民藏氏・厨川白村氏

エレン・カイ女史——エミル・ルツカ氏

造擴張説……………三二

杉森孝次郎氏——有島武郎氏

上掲諸説の概評……………四二

戀愛の欲求的方面——根本の情調——個我の高調——厨川氏の所説——説明の不足。

後篇 予の戀愛觀

愛とは何ぞや……………四八

自他一體の靈的體驗——自他一他感と具體的顯彰の要求——其の説明——自動的

機縁と他動的機縁——具體的顯彰の無意識的と有意識的

戀愛の定義……………五七

異性間の愛と戀愛——自然的障礙と人為的障礙——漠然たる性交欲の僅起——擬似戀愛——性欲の特殊化——種族の欲望と人格の要求——戀の目ざめ——異性美の現前——戀愛の定義

美と戀愛……………六二

本質的關係の有無——プラトーン、シヨペンハウエル、エミル・ルツカ、ワイニンゲ

ル——美は愛の機縁——美とは何ぞや——その渾融力——理想の具體的現前。

異性美とは何ぞや……………六六

異性に對する要求——肉交欲、生殖欲、補足欲、聖化欲——異性に神を求む——

女神崇拜——女性の聖化欲。

ウエスターマークとエリス——形體美と精神美——健康の光と人格の光——健康

美と風土の關係——人格美と社會組織。

個人的要求——Disparity と Parity——奇矯——模倣的要素——流行の變遷。

異性美と肉交欲……………七九

美術の起源——サンタヤーナ的美感論——美感と性欲——快感の客觀化——肉交

欲の依存——他の欲求との關係——八重垣姫、ヒグマリオン——彫像姦、畫像戀
 愛——倉田氏の性的悅樂——肉交欲の理想化。……………
 戀愛開發の機縁……………八五

(一)長時間の交際接觸——結婚後の戀愛——『拈華微笑』——友人、師長——イエ
 スとマリヤ——基督の花嫁——『基督の模範』——マリヤ崇拜。
 (二)電光石火の如き開發——鏡花氏の小説——佛典中の挿話——『海の夫人』の
 リーダー——超直入の聖境——ゲンテと釋尊。

戀愛の具體的顯彰……………九一

無意識的具現——握手、接吻、借老同穴、手蹟顔貌の相似。

有意識的顯彰——量の差、質の別——身神の不完と我執——當爲の要求。

性的道德……………九五

自由戀愛と同時戀愛——獨占的傾向——我執——嫉妬。

貞操の二相四面……………九九

男女共通の性的道德——消極と積極。

消極的——他人の我執に對する思ひやり——肉交——靈的體驗の自己飽滿——失
 戀なるものなし。

積極的——自分の我執に對する督勵——靈的體驗の投射——異性の聖化——『所
 天』——自他一體感の維持——蓮葉上の露——戀の憧憬。

結婚の意義……………一〇九

戀愛具現の社會制度——戀愛と結婚及び離婚。

結婚は戀愛の墓……………一一一

厨川氏の解——執着——愛の萎縮死亡——宗教史に於ける獨身主義。

戀愛の聖化……………一二四

神前婚禮——その理想的意義。——天籟と琴瑟和調——天國淨土開顯の基礎。

目次終

予の戀愛觀

中 桐 確 太 郎

大正十一年十二月
文藝哲學講座にて

緒 言

戀愛とは何ぞや、これは實に千古の神祕であります。且つ此の如き問題に對して容喙いたしますことは、私の柄ではないやうにも思はれます。しかしながら、私にも十數年來懷いてをる一の戀愛觀があります。體驗と思索との貧弱なるためでありませうか、爾來大して進轉もいたしません、また見聞學問の淺狹なるためでありませうか、全然同一の所説に接したともないやうでありますか

ら、かゝる研究會を機として、私の所見を申上げ、近來此の問題に關する論議の盛んなる折から、諸君の御参考に供し、御批正をも仰ぎたいと思ひまして、幹事小西君の御勸めに敢て應じて、參上いたした次第であります。

さて戀愛は頗ぶる複雑なる要素より成立つてをります。ハーバート・スペンサーはその心理學に於て、その要素を分つて九つと致してをります。それ等の一つを取り、それを根本要素として、議論を立つることも出來ぬのではありませんから、戀愛に關する諸家の議論も、とり／＼に眞實なるものがあると申してよろしうございませう。只問題は其の占むべき地位如何であらうかと思はれます。私は只今これから自分の所見をのべるのでありますが、それは諸家の見解所説を排するの意味ではなく、それを各の當然の位に配して、之を自分の立場から眺めて見ると申すに過ぎません。

前篇 戀愛觀の諸相

戀愛に關してまとまつた意見を述べられた思想家は、東洋にも古來決して尠くはないことゝ思ひます。易の繫辭には『乾道成^レ男、坤道成^レ女、乾知大始、坤作成物』とあり、中庸には『君子の道は端を夫婦に造す、其の至れるに及びては天地に察かなり』とありますし、印度の古典や、佛教の經論などにも必ずあることゝ存じます。しかしながら、これは私の未だ承はり及ばざる所でありまして、到り深き方々に教へを請はねばならぬことでもあります。西洋に於てこの問題を最も詳しく取扱ひ、影響を後世に及ぼしてをりますのは蓋し希臘のプラトーンであります。

プラトーン

古今東西第一の哲學者と稱せられてをりますプラトーンの所説は、御承知の通り、その著『對話錄』^{ダイアローグ}三十有餘卷に收められてをります。何れも其師ソークラテースを中心とし、その友人若しくは弟子等を之に配し、種々の題目につきて對話せしめつゝ、その間に哲理を述べたものであります。全體戯曲風のもので、極めて興趣深きものであります。それ等の中、愛につきて述べてあるものは『饗宴』^{シンポジオン}と『フェドロス』との二篇とせられてあります。今比較的まとまつてをる『饗宴』篇につきて申上ぐることゝ致しませう。『プラトーン全集』は木村鷹太郎氏の譯があります。詳しくはそれについて御覽を願ひます。

ソークラテースの弟子にアガトーンと申す眉目美はしき青年がありました。その初作の悲劇が懸賞に當選したので、それを祝せんがために、その家に開かれたる饗宴に、ソークラテースや、その弟子たち數人が相會したのであります。

さて今日の話題を何にしやうかといふことになりました時、その中の一人が、愛の神に對する讚美歌は、從來の諸詩人が未だ曾て試みたることなきが故に、今日はそれをものし合ふべしと申出でましたので皆之れに同意し、順次語り合つたのであります。

いろ／＼の人がいろ／＼の方面より愛を論じ合ふたのですが、そのうちに、アリストファネスの次ぎのやうな話もありました。

人間はその始め、男性、女性、男女兼性の三種に分れてをりました。手足が四本宛で、顔が両面についてをり、極めて敏捷活潑で、神々に對して惡戯わるさをしてうるさくて仕方がないので、一日八百萬の神々が神づとひに神集まりまして、その處分法を相談せられ、寧ろ之れを絶滅しては如何といふ提案もありました。人間を絶滅すれば、犠牲と禮拜とをさゝぐるものがなくなるので、そこで

主上神ツオイスの尊の考案に従ひて、すべての人間を中央より眞二つに切り離すことゝしたのであります。人間の體はもと骨にてつゞまれてをつたものであります。今切られた方は皮を引き寄せて之をつき合はせました。今何人の腹部にも残つてをる縦のつぎ目は其の痕跡ださうであります。そうして脊骨の方に向ひをつた顔をねぢむけて腹部の方の醜き方面を見ることが出来るやうにしましたので、人間の心も自然謙遜になり、いくらか元氣もそがれ、惡戯も少なくなつて神様には誠に都合のよいものとなつたのであります。困まつたのは人間であります。二つに切られたもの同士は、どうかして、元の通りに一つになりたといふ思ひは念々絶えないのであります。即ちもと男性であつたものが男子を好みます、これは男色の欲であります。もと女性であつたものは同じ女性を好みます、これは女子の同性愛であります。もと男女兼性であつたもの

が、異性相求むるので、これ即ち異性相愛の情であります。此の如き相思の情の欲求しつゝあるものは何でありませうか。それは決して肉交の快樂のみではありません。即ちもとの完全なる一體とならんとするに外ならぬのであつて、此の欲求を稱して愛と名づくるのであります。

此話がありました次ぎに、アガトーンはまた美はしき辭を盡して愛をすべての方面より讚めたゝへました。

ソークラテースはこれ等の色々の話を聞き了りまして、「いづれもとり／＼に面白いのであるが、寧ろ愛に對しては過當の讚美たるの憾がある。故に自分が若かりし時、女預言者なるディオチーマより聽ける所によりて愛の真相を説くべし」といひ、大要次ぎの如き話をしたのであります。

昔しアフロデチー尊の誕生祝宴の日、豊富と名づくる一人の雄神、酒に酔う

て花園に熟睡してをりました。たまたまそこに參りました貧窮と名づくる乞食の女神が之を見まして、之を誘惑し、それによつて生れ出でましたのが愛の神エーロスであります。

愛は此の如く貧窮を母として生れ出でたものでありますから、美でもなく、善でもなく、貧困にして、甚だ見すばらしいものである、然しながら、また父の性を享けまして、美を愛し、善を愛し、強く大膽に、智力に富んで進取的である。完全なものでもなく、また全然不完全なものでもなく、兩者の中間にあつてその聯絡を司どる中保者であり、大精靈の一つである。

人はよく愛はその半身を求むといふのであるが、半身でも全體でも、それが善美でなければ、之を求むるものではない。愛は即ち善美を求むるものである。愛は常に善美をあこがるゝのみでなく、また之を所有しやうとし、而して永

遠に之を所有しやうとするのである。常に永遠に之を所有しやうとするのみでなく、また善美を生み出し創造せんとするものである。何故に生産創造の欲求があるか、これは本来死滅的のものが、これによりて不滅的のものたらんとするためであるのである。

然れども個々の美は、要するに絶対圓滿なる美の反映に過ぎぬ。もし愛の指導、正しきを得るならば、人は個々の美より進みて普遍の美にゆき、形態の美よりして行爲の美に及び、美なる行爲よりして美なる概念に進み、美なる概念よりして更に絶対美の概念に達し、遂に美の實相の如何なるものなるかを知るに至るのである。そうして人をして此の境界に達せしむるにつきては、愛を措いて他に適當なる助力者あるを知らぬのである。

以上の要旨を敷衍して例の通り巧みにのべをはりますと、一同拍手喝采しま

した。此時酩酊せるアルキピヤデースは多くの人々と闖入し來りて、今日の祝ひをアガトーンに述べ、ソークラテースがその傍に在るのを見て驚き、それから、ソークラテースの徳を讚美するといふ筋になつてをるのであります。

プラトンは此の『饗宴篇』に於て、いろ／＼の人の口をかりて、種々なる方面より愛を説かしたためたのであります。此の中心意見はその師ソークラテースをして述べしめた所にあることは申すまでもありません。即ち此の説によりますと、異性間の愛には餘り重きを置かず、愛を以て善美を憧憬し、之を創造し、更に人をして圓滿絶対の眞美に體達せしむるものとなすのであります。後世、性欲を離れて美を憧憬することを以て、プラトニック、ラヴと稱するに至つた所以であります。此戀愛觀は歐洲中世紀を通じ、殊に所謂る文藝復興を経るに及びて、ますます認められ、種々なる形を取つて大なる影響を歐洲思想

界に及ぼし、また及ぼしつゝあるのであります。

シヨベンハウエル

然るに十九世紀の始めに當つて、例のシヨベンハウエルがその大著『意志と現識としての世界』(これには姉崎博士の譯があります)の中に全く別なる方面から、その戀愛觀を發表したのであります。

シヨベンハウエルは古往今來、本當の哲學者といふべきは、プラトーンとカントと、そうして自分だけであると自ら誇つてをる人ではありますが、此問題に關してプラトーンを批評して、次の如く申してをります。

(今まで哲學者が殆んど全くその觀測に上してをらなかつた此の愛情のこ

とを)最も多く考へたのはプラトーンで、その『饗宴』と『フェドロ』との中に殊に詳しく論じてをるが、然し彼がそれについて提出したことは、神話、昔譚、洒落の範圍での事で、大部分はギリシヤの男色のみに關してゐる』

その他スピノザでもルソウでも、カントでも、淺薄皮相、誤謬だらけであるとして、さて自説を述べて、

『戀といふものは如何に空靈に彩られても、その根柢は性的本能にあるのである。要するに特殊にせられ、個體化せられたる男女の性交欲即ち性欲に外ならぬのである。』

個々の男女は各々自分の幸福を得んがために、相戀しつゝあると思つてをるが、實は種族の詐謀に欺かれてをるのである。種族が自己の生命を永續

發展せしむるために個人の爲我心を利用して妄想を附與したのである。此の妄想とは即ち本能(性欲)である。

此の性欲は美の感覺によりていつでも導かれてをる。即ち人は先づ一番美しい個體を最も好み強く之を望む。乍併、美はしい個體とは種族の性格が最も純潔に現はれてをるものに外ならぬ。人はまた、それに次いで自分分に缺けて居るところを完全に持つて居る者や、また不完全のものでも自分に反對した相手を美はしいと思ふ。例へば脊の低い男が高い女を求め、金髪の人が黒髪の人を求めなどする、そしてそれに見惚れて、その人と一つになるのが、自分の最上の幸福だと考へるのであるが是は即ち種族の感覺であつて、種族の型を維持せんとすることに過ぎぬ。

そしてそれらの目的とするところは要するに、種族の永續の目的にかなふ

その
見解
と異なると
思ふ

小兒を生まんとする事である。即ち戀愛は畢竟するに生れ来るべき小兒を豫想してをるので、生殖がその目的なのである。それが貴いものであるやうに思はれ、超越的なる感じの伴ふのは、つまり宇宙の根本たる生きんとする意志の客觀化である種族が、自からの永續性を實現せんとする試みであるに外ならぬ。』

シヨペンハウエルは此の主意をいろ／＼の點よりこまごまと述べてをるのでありますが、此の説はまた非常なる勢力を有して、その根本思想の如きは殆んど凡ての近代の科學的思想家に承認せられつゝあるのであります。

現代の戀愛觀

Personal Love

以上述べましたプラトーンとシヨペンハウエルとの相反對せる二つの戀愛觀は頗ぶる大なる感化を與へつつあるのでありますが、個我意識、人格尊重の念の著じるしくなつてまゐりました當今に於ては、此のまゝにては満足することが出來ぬやうに感ぜられてまゐりました。プラトーンが殆んど性欲を度外視し、絶對美に對する憧憬の情にのみ重きをおいてをるのは、個我人格を認めないので、明かに非人格的 (Impersonal) の趣きがあります。

またシヨペンハウエルは性欲を根本とはいはしてをりましたが、その本體は種族の要求であつて、戀愛の情はその詐謀によりて惹き起されたる一の迷妄に

過ぎぬものと見てをりますから、個我人格を輕視するの調子がつよく、また非人格的のものであると謂ふべきでありまして、此點は現代人に飽き足らぬ感じを與へるのであります。現代人にとりては戀愛は個我人格的になつてをりまた然かあるべき筈と感ぜらるゝのでありますから、戀愛とは何ぞやといふ説明も、變形賦彩を加へて行かなければならぬやうになつたのであります。かうしていろ／＼の戀愛觀が現はれて參りましたが、私は大體之を性欲醇化説、靈肉一致説、創造擴張説、の三種に別つて見ました。不徹底や誤解もあるかも知れませぬ、命名も訂正を要するのですが、それ等はどうぞ御諒恕を願ひます。

其一 性欲醇化説

此の説の我國における代表者と申すべきは聰明なる徹底個人主義を唱へらる

田中王堂氏でありませう。氏はその戀愛觀を中央公論（大正十一年四月號）や婦人公論（同年十一月號）に於て發表せられてをりますが、その後者によりてその大要を申しますれば、

「人は營養と生殖との二つの衝動によりて、無限に生きんとしつゝあるものである。此のうち、此生殖は他人の力を借りて自分の死後に子孫の繼續を圖つてをるもので、即ち性的方法によつて行はれるものであるから、生殖の衝動は性欲の形を取つてはたらくことになる。

世の中には性欲は肉欲的であり、戀愛は精神的であるといつて、兩者を峻別しようとする論者もあるけれども、兩者は本質的に差別があるものではなく、戀愛は組織せられてはたらく性欲に外ならぬ。本質の上では戀愛の中に見出され得る一物でも、性欲に缺けて居たと信することは出来ない。

又性欲の中に見出されなかつた一物でも戀愛に到つて附け加へられたと信することは出来ない。性欲が肉欲的であり、それによりて快樂が追求されて居るならば、私共は戀愛はさうでないとして言ひ得るか。又戀愛が精神的であり自他の人格の完成を目的としてをるならば、私共はどうして性欲にさういふ性質が含まれてをらぬと言ひ得るであらう。

○ 戀愛は信仰でもなく、美感でもなく、又功名心でも、經濟欲でもない。戀愛は他の種の欲望と等しく、生活の機關である。文化人に取ては他の機關が戀愛に對して一つの作用であらねばならぬ如く、戀愛はそれらのものに對して、一つの作用であらねばならぬ。かく解するものが戀愛の正當なる解釋である。

若し理性的といふ意味が未來に於て實現される條件のために、現在の資

力を支配すること、他人との協同を構成するために自分の行爲を、それによりて整齊することの外に何物をも意味しないならば、戀愛は生殖衝動、そして性欲の理性化せられたるものに外ならぬ』

以上は田中王堂氏の戀愛觀であります、これは戀愛を以て性欲の理性化せられたるものとなされたのでありますから、假りに名づけて性慾醇化説と申しました。此點より見ますれば倉田百三氏の戀愛觀の如きも此中に入るゝことが出来るかと思ひます。

倉田氏は數年前に『地上の男女』といふその論文の中に於ては、性欲と戀愛とを峻別せられてをつたのでありますが、『靜思』と題する新しき著述の中に收められたる『戀愛と性欲に就いて』といふ論文に於ては、それを修正して『戀愛は性欲から分化したるもの』とせられてをるのであります。氏の言葉に

『戀愛は性慾と質を異にするものでなく、より高き形に於ける性欲である。その意味に於ては、如何なる天的なる戀愛も性欲を除拒したものでなく、精煉されたる、高められたる性欲である。どぶろくの如き酒より、最も芳醇なる清酒が精煉される如くに性欲の衝動の中より純化せられたるものであつて、始めより異質のものではない。故に戀愛が肯定せらるゝ可きものであるならば、性欲はそれ自身に於ては肯定さるべきものである』

然しながら性欲には、それ以外の動機が加はつてくる爲めに、その結果なる肉交は不純になり、汚濁され、呪ふべきものとなるのであるとなし。その動機を第一征服慾、第二翻弄の意識、第三相手を手段とする意識、第四肉交を他の目的の手段となすこと、第五に豫め快樂を豫想すること。の五種に別ち此等五種の一つをも含まざる、無邪氣なる、それも生得の無邪氣でなく、修徳により

て贏ち得たる無邪氣なる肉交ならば正しいのであるが、併しながら、たとへ無邪氣なる肉交であつても、『自分の描く戀愛の最も美はしき構圖からは、之を拒斥したく思ふてをる』と述べ『造化が生命に附與したる根本要求である性欲は、漸次その可能性を分化發展して肉體的より精神的に進み行くものであつて、その最高のものは天的なる戀愛である』として、次の如くいうてをられる。

『無邪氣なる肉交は罪惡ではないが、低きものである。天的なる戀愛は肉交なくして、性欲が飽和するものでなければならぬ。此れ性欲を淡くせしめたる結果でなく、淨められたる結果である。その人は最早や肉交せずして低きものが肉交によりて感ずるよりも大なる満足を感じ得るのである例へばフラ・アンゼリコの描く天の使を見よ、我々はそれに對して性的なる悅樂を感ずることが出来る。然かもその悅樂は性慾を除去することによ

つては決して得られない種類のものであり、只性欲を高め、淨めることによつてのみ達せられたる悅樂である。

『天的なる戀愛には、もはや肉欲なく、苦惱なく、嫉妬や、鬭争なく、又激情さへもなく、只靜かなる美のみが支配するのである。然しながら、かかる戀と雖も、造化が始め生物に附與したる性欲を排除して得られたのではない。それが純化されてその内の精のみとなつたのである。若しそれが排除されてゐるならば、その美は或る一種の美であつても、我々を性的に喜ばせることは出来ない。』

氏はどこまでも戀愛のうちより性欲を排除せざらんとしてをる。生殖といふことより超越せる性欲とは如何なるものであるか。『何等の目的なき『遊行』の世界『遊樂』の境とは蓋し『直感なきものに説明することは不可能である』とし

て、何等の説明を加へられてをらぬ。尤もその結婚問題に觸れられたるところに於て『男性なるもの』^{ダスマンリッヘ}『女性なるもの』^{ダスワイブリッヘ}等の語がありますけれども、目的を拒斥せられつゝあることゝ如何に關係せしむべきかについては、明かに説かれてないのは物足らぬやうに感ぜられます。要するに戀愛を以て性欲より醇化せるものとする點に於ては、田中氏の説と同一である。もし田中氏の戀愛觀を以て性欲理想化といふならば、倉田氏のは性欲理想化ともいふべきであります。戀愛を以て性欲より進化せるものとする考へは、進化論優勢の當今、殆んど全世界の等しく認めてをる所であります。併し性欲は要するに種族繼續に對する欲求であります。戀愛の主なる要素を、此欲求にのみ限るが如き趣きある上述の戀愛觀に満足せずして、更らに人格完成の思想を附け加へて更に新たな見解を取らんとしたるが、次ぎの靈肉一致説であります。

其二 靈肉一致説

我國に於て此説を取つてをらるゝ方は、此たび本會に講演せられます本間久雄氏や、同じく早稻田大學の島村民藏氏や、また『近代の戀愛觀』の厨川白村氏などでありませう。何れもエレン・カイ女史や、カーペンター氏などの流れを汲んで居らるゝものと思はれます。

『新しい戀愛といつても、なほそれは男女が種族の繼續のために互ひに牽き合ふところの自然的魅力でもある。また主動的な人間が、友情に依つて他人及び己れ自身の困難を同時に救はんとする欲望でもある。然しながらこれ等を超越して、もう一つの懂がれが愈々強まりつゝある力を以て、育

つて来て居る。……それはこの世に只一人であるといふ人間の寂寞感から起つてをる。この寂寞は個人の心霊が偉大なれば偉大なるほど、痛切に感ぜられる。それは己れの心霊を、その孤獨の苦しみから救うてくれるところの他の一人の心霊に對する憧憬に外ならぬ。この孤獨の苦しみは、嘗ては神の胸に安まることに依つて静められたけれども、今やそのところを自分と同等の、の、即ち同じ憧憬がれに熱したところの眼を開いて居る心霊のうち求めるのである。……

『二つの心霊が、その感覺の分有してをる愉樂を持ち、その感覺が、その心霊の高尙化してをる歡喜を持つ時、その結果は、なる内的要求でもなく、また單なる友情でもなく、兩者ともが一の新しき感情に吸ひこまれて居るのであつて、そのどちらの一方にも比すべきではない。恰かも空氣が其組

成要素の一つに比すべきでないと同じである。窒素は空氣でなく、酸素も空氣ではない。肉感は戀愛でなく、また同情も戀愛ではない。それらが合した時、空氣であり、また戀愛であるのである。……偉大なる戀愛はたゞ一つの異性の内的要求が、その對性の心霊に對する熱望と全く合致せる場合に於て生ずる。』

これはエレン・カイ女史の名著『戀愛と結婚』（原田實氏譯）の中の語でありまして、戀愛を靈肉一致たるべしとする説であります。

そして此『對性の心霊に對する熱望』とは何であるか。同女史の語に、

『近代婦人の戀愛は何よりも先づ、それ自身の完全と圓成とに對する飽くなき欲と、男子の感情内に於ける反應的完全と圓成とに對する飽くなき欲求とによりて、古代婦人の戀愛と區別がつくのである。』

と申してをらるゝ如く、互に人として自我を充實せしめ人格を完成せんとするにあるのであります。

同女史はまた『婦人の道徳』と題する論文や『戀愛と倫理』と題する書物に於て大體次ぎのやうな意見を述べられてをります。

『道徳的、知力的に於て同一程度にある男女が、相愛することによりて、完成せられんことを要求する、これ最高の戀愛である。』

此の如き最高の戀愛に於ては、二人の戀人は全く一體となることを感ずるのであり、此感情は人格を自由にし、之を保全し、また之を深めるものである。而してまた天才の貴き事業を鼓吹するものである。

『此の如き戀愛によりて成れる結婚のみ道徳的なのである。そしてまた子供は此の如き両親によりて生るべき權利を有するのである。此の如くにし

て始めて個人の幸福と種族の改善とが統一せらるゝのである。

故に戀愛は結婚に於て自由でなければならぬと同時に、その種族改善のためには責任をもたねばならぬ。即ち自由と責任とがあるによりて戀愛は人格的となり、人間進化の大原動力ともなるのである。』

エレン・カイ女史等の戀愛觀は上述の如く靈肉一致を主張し、人格完成といふことに重きをおくのであります。また種族の繼續、向上にも重きを置くのであります。然るに同じく靈肉一致を主張するエミル・ルカ氏は此の説の如きは未だシヨベンハウエルの迷妄から脱し得ざるものであるとなして、純粹なるパーソナル・ラブ觀を立てゝをるのであります。

『元來肉交欲と生殖欲とは全く別なる意識である。然るにそれを合せて一つの本能とするのは、一つの空想的哲理であつて、精神的實在ではない。』

此の如き空想説の生ずる所以は畢竟するに一般の感情が性交を以て卑陋とするに係らず、なほ戀愛に於ては實際上尤も欲望せらるゝものであり、然かも之を承認するの勇氣を缺くが故に、社會的立脚地から之を是認せんと試みたるに過ぎぬのである。

純眞の人格的戀愛は本能によりて興起さるゝものではなく、性的衝動より分化せるものでもなく、何等性欲を意識することなしに靈肉一如の愛人を抱擁するのであつて、そしてその頂點は非生殖の實際的證明ともいふべき情死 (Love-death) に至つて極まるのである。

要するに個我人格は人生の悲劇に終極せざるを得ぬ。何となれば人格である限り、相愛者は二者であつて一體ではない。永遠なる二元、こゝに無限の寂寞がある。兩者の完全なる一致は生の到底與へ得ざるところである。

一超直入の門は即ち死の外にはない。情死これ實に自他一體の究竟なる悦境である。

これはエミル・ルカ氏の戀愛觀であります、もしエレン・カイ女史等の所説にシヨペンハウエルの感化、著しきものありといふならば、ルツカ氏の方にはプラトーンの影響、尠なからぬものありといはねばなりません。これはルツカ氏も認めてをらるゝ所であります。兩者共に靈肉一致を主張せられつゝありながら、前者に比すれば後者の説はその個我といふ考へに執らはれ、而かも消極的となりたる趣きありと申すべきであります。

此消極的なるに満足すること能はず、而かもなほ子孫後昆に奉仕するといふ如き考にも満足すること能はざるが如き立場にたてる戀愛觀は次ぎに述ぶる、創造擴張説であります。

其二 創造擴張説

此の立場の代表としては杉森孝次郎氏と、有島武郎氏とをあげることができると思ひます。

杉森氏は「人生の目的は創造にあり」といふ立場に居らるゝ方であります。その戀愛觀は大正十一年四月の『改造』に掲げてあります。その大要は次ぎの言葉の中に明かに見らるゝやうであります。

『愛の衝動は根源的に創造であつた。愛の理想は今後ますます／＼それであるべきである。或意味の愛は母愛に於て最も純真にして完全だ。けれども他の意味に於ては愛の代表的場合は性愛だ。性愛は愛の第一歩だ、母愛は愛

の第二歩だ。性愛の結果が子だ。母愛は子を得て始めて可能にされる。

子を産むことは創造だ、産まれた子を完成する努力も創造だ。性愛と母愛とはかやうにして愛の本質が創造にあることを露骨に語る。

氏は又戀愛の自己的なるものなることを論せんがために、種族保存説に對して、次ぎの如く云つてをられる。

『子を育てるとか種族保存とか生物學的不死とかいふ見地から單純に考ふれば、單なる手段になつてしまふ戀愛が、單なる手段としては、餘りに高い目的價を事實上、即ち心理上及び行爲上、まれならず明示し、また暗示する所にも戀愛の、さらに又いはゞ不可思議の一特異質が想見せられる。

機會を原因と見、結果を目的と見ることは人間によつて、しば／＼犯される過誤だ。……子孫繁殖は、人生の偉大な營みであるに毫頭疑ひを挿む

餘地はない。しかし時間に於ける一瞬前は一瞬後を目的としてのみ存在するといふ、また、すべきだといふ見かたは原則的に謬見だ。その假定のもとには、経験の最後の一瞬間が、唯一の目的で、その一瞬間に達するまでの全歴史はそれ自身には何等の價值をも持たないといふ判断が成り立つ。宇宙の運動の最終の一刹那、これのみが有意義であつて、その以前の全時代はそれ自身には無目的存在と経験であつたといふ判断がなりたつのだ。けれども此の判断は心理的不眞實だ。』

そしてまた次の如くいつてをられる。

『愛は眞實には自己的だ。戀愛は相手次第のやうだが、それは浅い現象だ。戀愛は自己の本質的必要だ。……故に相手が貧弱であつても、どんなにも強く明かにも發動するのだ。選擇可能の少ない場合に於ては美ぐらゐるをば

創造して補足する。また選擇の自由は多大であつても、戀される人は戀する人次第だ。同じ人でもその人を戀する人が異なれば、實はその異なる戀する人々の意識内容としての、認識對象としての戀される人は、その戀する人々が異なる丈に異なり、戀する人の氣質、年齢、それから経験といったやうな要素が、戀される人を、全然創造しないまでも形成する。戀される人の客觀的存在としての材料に加工する、その加工した結果を戀する人は觀照し、崇拜し溺愛する。その加工の原則と方法は、しかく戀する人自身の本質的所有だ。

『出産は自己再生だが、戀愛そのものが出産以上にも微妙なかたちにて自己再生であるのだ。客觀的自己再生が戀愛であり、瞬間的自己再生が母愛だ。横に自己を延ばす努力が戀愛だ、縦に自己を擴げる努力が母愛だ。』

人は戀せずには自分がすまない。戀愛が自己主張でないならば、自己主張とは絶対に無意義の言葉だ。かくして、愛はその最根柢の眞實相に於ては無我ではない、自己再生だ。自己擴張だ。」

そして次ぎの如き言葉を加へてをられる。

『他の一人を愛することは自己のハートが自己及び其一人を共通して、動悸をうつことだ。自己のハートのそれだけの擴充だ。』

此の最後に掲げました語は有島武郎氏の有名なる著述『惜みなく愛は奪ふ』の中に掲げられたる次ぎの語と共通して動悸をうつてをる如き趣きがあります。

『私の體驗によれば、愛は奪ふ本能、吸引するエネルギーである。』

『小鳥のしば鳴きに、私は小鳥と共に或は喜び、或は悲む。その時、喜びなり、悲みなりは、小鳥のものであると共に、私にとつては私自身のもの

だ。私が小鳥を愛すれば愛するほど小鳥はより多く、私そのものである。私にとつては小鳥はもう、私以外の存在ではない。小鳥ではない。小鳥は私だ、私が小鳥を生きるのだ。I live a bird. だ。だから私は美しい籠と、新鮮な食餌と、やむ時なき愛撫とを餘物に恵み與へた覚えはない。私は明かにそれらのものを私自身に與へてゐるのだ。私は小鳥とその所有物の凡てを残す所なく、外界から私の個性へ奪ひ取つてゐるのだ。見よ愛は放射するエネルギーでもなければ、與へる本能でもない。愛は掠奪する烈しい力だ。

有島氏の『惜しみなく愛は奪ふ』は氏の人生觀の結晶でありませう。その公刊せられました當時、私も或ところにて、その批評をいたしたことがありましたが、氏は非常に眞面目な方であると同時に、また理性的な人であります。知

識的生活と道徳的生活との二元的なるに自から惱まれ、一元生活に憧憬せられたのも、此の二つの性質の相絡んでをる所からの結果でありませう。一元的生活とは何であるか。本能に従ふの生活である。本能とは何であるか。愛することである。愛とは何であるか、自我を擴張することであり、獲得することである。そうしてポロが『愛は惜しみなく與ふ』といへるに對して、『惜しみなく奪ふ』と定義せられたのでありませう。然しながら、愛に關する氏の此の見解には、『惜しみなく奪ふ』といふ語が示してをる通りの矛盾さを感じさせます。有島氏は此書『惜みなく愛は奪ふ』の中に申してをられます。

『私は私自身を愛してゐるか、私は躊躇することなく愛してゐると答へることが出来る。私は他を愛してゐるか、これに肯定的な答へを送るためには、私はある條件と限度とを附することを必要としなければならぬ。他が

私と何等かの點で交渉を持つにあらざれば、私は他を愛することが出来ない。切實にいふと、私は己れに對しての愛を感じるが故にのみ、己れに交渉を持つ他を愛することが出来るのだ。私が愛すべき己れの存在を見失つた時、どうして他との交渉を持ち得よう。而して交渉なき他にどうして私の愛が働らき得よう。だから更に切實にいふと他の何等かの状態に於て、私の中に攝取された時のみ、私は他を愛してゐるのだ。然し己れの中に攝取された他は、本當をいふともう他ではない。明かに己の一部分だ。だから私が他を愛してゐる場合も、本質的にいへば他を愛することに於て己れを愛してゐるのだ。而して己れをのみだ。

これは有島氏の立場よりは自然のことでありませう。そして氏は所謂利己主義なるものとの區別を述べ、利己主義なるものは『生物學の自己保存の原則

を極めて安價に査定して、それを愛己の本能と結びつけたものでなかつたらうか』といひ、さて

『然し、それ丈で満足し切ることを私の本能の要求は明かに拒んでゐる。私の生活傾向の中には、もつと深く、もつとよく己れを愛したい欲求が十二分に潜んでゐることに氣づくのだ。私は明かに自己の保存が保障されたゞけでは飽き足らない。進んで自己を押し擴げ、自己を充實しようとし、而して意識的にせよ、無意識的にせよ、休む時なくその願望に驅り立てられてゐる。この切實な欲求が、この功利的な利己主義と同一水準におかれることを私は退けなければならぬ。それは愛己主義の意味を根本的に破壊しようとする恐るべき傾向であるからである。私の愛己の本能が若し自己保存にのみあるならば、それは自己の平安を希求すること、知的生活

に於ける欲求の一形式にしか過ぎない。愛は本能である。かくの如き境地に満足する譯がない。私の愛は私の中にあつて最上の生長と完成とを欲する。私の愛は私自身の外に他の對象を求めはしない。私の個性はかくして生長と完成との道程に急ぐ。然らば私はどうしてその生長と完成とを成就するか、それは奪ふことによつてゞである。愛の表現は惜しみなく與へるだらう。然し愛の本體は惜しみなく奪ふものだ。

有島氏は愛を讚美して次ぎの如くいはれてゐる。

『愛は私の個性を哺くむために、外界から奪ひ取つて來るけれども、そのために外界は寸毫も失はれることはない。例へば私は愛によつて、カナリヤを私の衷に奪ひ取る。けれどもカナリヤは奪はるゝことによつて幸福になるとも不幸にはならない。かの小鳥は少くとも物質的に美はしい籠へそ

これは醜い籠にあるよりも確かにいふことだらう」と、新鮮な食餌とを以て富まされる。物質の法則を超越したこの神祕は私を存分に驚かせ、感傷的にさへする。愛といふ世界は何といふいふ世界だらう。

此の如く、有島氏の説と、杉森氏の説とはその個我の主張に重きを置かるゝところに共通の趣きがあると思ひますので、これを同系の中に配することゝしたのであります。

上掲諸説の概評

戀愛に關して所見を發表せられた方は決して、以上に止まらぬとは申すまでもありません。然しながら、最近あらはれました代表的なるものによりて見ま

すれば近代の戀愛觀は大體以上の三種に別つことが出来るかと思ひます。いづれも貴き體驗と思索との結果より出でたるものでありまして、とりどりにめでたく動かし難きものがあると思ひますが、此のうち、種族の繼續といふことに重きをおく性欲醇化説、それに人格の完成といふ要素を加へ來れる靈肉一致説でも、また最後の自己の擴張を主とせる説でも、何れも共に戀愛を欲求の方面より觀て、それにのみ重きをおける説のやうに存せられます。戀愛に此の方面があるのは事實でありますが、たゞ是れ丈では物足らぬことは、戀愛を経験せるものゝ感ぜざるを得ぬ所でありませう。これ倉田氏の如く性交せずして性交せると同じき満足を得る性欲を説き、エミル・ルツカ氏の如く、情死によりて極現せしめられる靈肉一致を説き、有島氏の如く惜しみなく奪はれて、而かも毫も失はれざる神祕を説かねばならぬに至れる所以ではありますまいか。

殊に創造擴張説の如きは個我的主張が餘りに、高調せられてをる様に感せしめらるゝのであります。例せば、戀愛の經驗には自我の擴大といふ感じのあるのは事實でありますが、之を以て、奪取の結果、獲得の感であるとするが如きは、如何なものでありませう。『われははも、やすみ子得たり、皆人の得がてにすといふやすみこ得たり』といふが如き場合には、獲得の感があるといふことが出来るでありませうが、すべての戀愛の經驗を奪取・獲得といふ如き言葉にていひあらはすのは、問題であると思ひます。厨川白村氏はその近著『近代の戀愛觀』に於て、

『だから現代の最も進んだ考へ方からいふと、戀愛の心境は即ち『自己放棄に於ける自己主張』 Self-assertion in self-surrender だと見られてゐる。おのれの愛する者のために、おのれの全部を捧げることはつまり最も強く

自己を主張し、肯定してゐるのである。戀人のうちに自己を發見し、自己のうちに戀人を見出したのだ。この自我と非我とのびつたり一致する所に、同心一體といふ人格結合の意義がある。それは即ち一方からいへば自我の擴大であり解放である。此境地に到つてはじめて眞の自由は得られる。小我を離れて大我に目ざめるからだ。わたくしが曩に宗教の法悦も戀愛の三昧境も同じだといつた意味は即ち茲にあるので、宗教家が求める解脱とか、大悟徹底とか、或は神の國、彌陀の淨土に達するといふ心境は、完全なる自我の解放、眞の自由生活に外ならぬ。それは唯一つ全き自己犠牲、自己放棄によつてのみ到達し得られる絶対境である。』

と説かれてゐるのは、『個人主義の弊を救はんとして』の御説でありませう。まことに此の御説 如く、戀愛の經驗の中には、自己の主張、自我の擴大とい

ふ感じと相離れて存せざる自己犠牲、自我放棄の感じがあると思ひます。そして
いろ／＼の欲求が起る前にむしろその奥に恍然たる自他渾融感とも名づくべき
一つの情調が湛へてをることは事實であると思ひます。然らばこれは如何に説
くべきでありますか、『近代の戀愛觀』にはこれ等に關する説明はまだ無かつ
たやうであります。私の戀愛觀はこの根本情調の説明の試みから出發いたして
をるのであります。どうぞ一應御聽き取りの上御批正を願ひ上げます。

後篇

予わたくしの戀愛觀

戀愛は異性間に起る特殊の愛でありまして、即ち愛の一様式であると思ひます。故に先づ愛とは何ぞやといふことにつきて、私の考察を申上ぐることにいたします。

愛とは何ぞや

是れにつきて私は或る機會に於て次ぎの如く申し述べたことがあります。

愛とは何ぞや。私の信じます所では、私と皆さんとは本來一體なのであります。常に皆様とばかりでなく、他の一切のものと一體であるべき筈であります。かう申しましたならば、汝は何をいふのか、汝は汝、我は我でないか、殊に個我意識の明瞭になつてをる今日、自と他と一體であるなどいふことは、時代

錯誤も甚だしいではないかなど、仰せらるゝかも知れません。それも御尤な次第で、人間の知識では正にその通りであります。或る機縁に觸れますと、此の知識の雲が破れまして、自と他との一體であるといふことを靈的に體驗することがあります。この體驗が心理的作用を通じてあらはれてまわりますと、自他一體の感となりまして、愛といふ心識の一要素を形づくりります。心理作用を知情意の三つに分ちますならば、これは知に屬しませう。此の自他一體感は一種の情が伴ひます、囚はれたる自我が解決せられ、擴大せられたることに伴ふ一種愉悅の快感を主調といたしてをるもので、愛の情的方面であります。此の感情が動きます時に、此の自他一體といふ體驗的事實をそれ／＼の相に於て、具體的に顯彰せんとする欲求を伴ひます。これが愛の意的方面であります。愛は知情意の三つを具備する心的作用であること、私は信じてをります。

この事につきては少しく説明いたしませば。凡そ人間の有する愛のうちにて、最も原始的で、自然的で、しかもこまやかなる愛は、母のその子に對する愛でありませう。同じく親であります、嚴父慈母と申します。嚴父と申します時は何となく理性の嚴肅さを思はせますが、慈母と申せば、如何にもなまけくしさが溢れてをります。たゞに人間の母親が然るばかりでなく、禽獸におきまして、父親は殆んどその子を見向きもせぬのが多い場合にも、その子のために犠牲的に劬勞せぬ母親がない位であります。何故に同じ親で、母親のみがさうであるかと申すに、私の考へます所によれば、母親は懷妊と分娩によりて、その子と自分との本來一體であつたといふことを、無意識的にても、認めざるを得ぬからであります。

また、同一の人を父と呼び、同一の人を母と呼び、同一の名を姓とし、同一

の家に住し、同一の食卓に就き、同一の庭訓を受け、時としては顔と音聲までも相似てをる。種々の點に於て、幼少の時より、同一といふことを深く印象せしめられつゝあるのであります所から、兄弟は他人の初めと申しまして、よく喧嘩を致しますが、一旦緩急あれば、外その侮を禦ぐだけの愛情が出るのであります。何人でも案内知らぬ外國に旅しまして、一番うれしいのは同國人に逢ふことでありませう。その人の職業、性質等凡て相知らぬ人でも、只郷國が同じといふ丈で何ともいひ知らぬなつかしさを感ずるものであります。外國で交つた一二年の友は、内地に於ける十數年の友誼にもまさるなどはよく人の經驗する處でありませう。尤も基督教の聖書にもあります通り、一人の旅人が、盜難にあひて、途に倒れてをるのを、同國人は知らぬ顔して行過ぎたるに、國を異にせるサマリヤ人が却つて之を憐みいたはり、介抱したといふことですから、

眞との愛の源は、別の深い處にあるとも申されませうが、自分と他とが何等かの點に於て同一であるといふことが知れた時、愛を感じるものであるといふことは明かなる事實で、いくらでも例説することが出来ると思ひます。

以上は自他一體たるの事實を知識的に覺識せしめらるゝことにつきて申したのであります。之を他動的の機縁と申しますれば、之に對して自動的機縁と申すべきものもあります。即ち一つの事業に協力同心して従ふことによりて、自他の一體を感得するに至る如き場合でありまして、前者の知識的機縁と離れては存せざるを常と致しますが、此の機縁によりて來る自他一體感は、單に知識的なるに比して一層切實なるものがあり、従ひて愛の活らきも一層堅確なるべき筈です。政治に普通選舉を實施して、愛國心の旺盛を期するが如きは即ち此の理合ひでありませう。

此の如くしてまた、同一といふことの事情が深ければ深いほど、高ければ高い程、靈的なれば靈的なるほど、愛の活らきも之に應じてまゐります。肉親の同一感よりも、道義上の同一感がまさり、道義上の同一感よりも信仰上の同一感が優るといふ趣きもあります。思ふに此の如き立場よりいたしましたれば如何なる種類の愛も、説明し得ると思ふのであります。即ち自他一體感を惹起す機縁の性質分量の異なるに従うて、その趣きも異なり、その相もいろ／＼に賦彩せらるゝものであります。

なほ愛はその自他一體たるの靈的體驗をそれ／＼の相に於て具體的に顯彰せんとする欲求を有してをると申しましたが、これは無意識的と有意識的とに別つて見ることが出来ます。まづ無意識的のものから申して見ませう。相知れる友が相會しますと、よく握手をいたします。女學校の學生さんなどには殊に著

るしいやうです。また接吻などに致しても何れも自然の發露でありまして、あながち、外國の禮儀をまねするのみではありますまい。即ち肉體的連結の形を以て、自他一體を表彰したものでありませう。會心の友相會しますれば出来るだけ長く相語り、別れを惜んで時の少きをかこつものです。相愛する男女の同棲を欲し、偕老同穴を契るのと同じ心理の發顯でせう。敬愛する先生の書物や舉動には知らずく感化せらるゝものでありますことは實例決して乏しくありません。夫婦の字は概して相似るものであります。番に字が相似るのみでなく、老夫婦はその面貌までも相似ることがあります。高砂の尉と姥とは相似せて畫かれてゐるのは、真相を傳へたものと謂ふべきです。

以上はいづれも無意識的自然的の具體化であります。有意識的顯彰になりますれば、愛の活動は一層目ざましくなります。即ちそれは自他一體たるの體

驗的事實を、それ／＼の相に於て自己の身體精神を通して、他に對して具體的に顯彰することにあります。他と申しましても、一人の場合もあり、數人の場合もあり、一切萬有なる場合もあり、(即ち量の差もあり)、狭きより廣く、少きより多きに擴大し行くが、愛の自然の要求であります。同じ他でありましても、その他が自分と同じく自他一體感を有する場合と、有せざる場合と(即ち質の別)によりて愛の活らき方が種々に變つて參ります。此等の詳しきことは、今は省略することゝ致しますが、要するに自他一體感には自我解放に伴ふ快感(淨められては聖悦ともなる快感)があるのであります。之を互に有してをります間柄に於ては愛のあらはれは融通無礙、自由自在であります。如何なることを互に爲し合うても、何のさばりもなく、恨みも怒りも起らず、自由と愛との天國淨土を現じ來るのであります。自他一體感を有する人の愛が、未

だ有せざる人に對してあらはるゝ時、多くの場合、前者が他の要求を満足せしむるために、己れを犠牲に供すといふ形にあらはれます。親が其子に對する時の愛は即ち是でありまして、之を慈愛と名けます。此の如き愛が一切衆生に對してあらはるゝ時、所謂大慈大悲であります。此の愛の活らきの感化によりて、未だ愛を感ぜざるものも、本有の自他一體感が刺激せられて惹起せしめられ、己れを愛する者を敬し、また相互に愛し行くべき義務を感せしめらるゝに至るのである。所謂、神、先づ人を愛したまふが故に、人は神を愛する所以を知り、人々互に相愛すべき所以を知るといふもの即ち是れであります。とにかく此の如くにして愛が惹起せられ、また自然の要求に従ひて廣がり行きます、そして此の娑婆と呼ばれ、憂き世と呼ばれてをる世界は一步步々天國淨土に向ひて進み行くのであります。

戀愛の定義

愛の本質は略ぼ上述の如しと私は思うてをるのでありますが、戀愛を以て愛の一様式となすならば之を如何に見るべきでありますか。

戀愛は異性の間に起るものでありますが、異性間の愛、必ずしも皆戀愛であるといふことは出来ません。

或學者は子供と母親との愛も性欲から來てをるなどと申してをりますが、假りに性欲より出づるものとしても、それは果して戀愛といふことが出来るでありますか、これは随分問題であらうと思ひます。兄弟姉妹の間に存する愛、親族間の愛、師弟間の愛、その他同學の友、同信の友等、異性の間に存する愛

も尠なからぬことではありますが、必しも戀愛といふことの出来ぬものであることは經驗的事實でありませう。

これらが戀愛とならないのは、性交又は結婚に對する自然的、若しくは人爲的の障礙がある故だけではありません。自然的障礙と申しましたのは、例せば親子同胞その他近親間、若しくは年齢の差甚だ大なる者の間に存する有害なりとせられたる性交に對する自然的嫌忌の情であります。また人爲的障礙と申しましたのは、道德的理由や、または單に因襲的なる習慣によりて性交の望みを杜絶せられたる場合、例せば他人の妻なるが故にとか、または未だ結婚せざる間柄なるが故にとか、または階級身分の懸隔あるが故にとかによりて、性交若しくは結婚をなすべきものにあらずとして、自から斷念せることをいふのであります。これ等の障礙がある爲に異性間の愛が、戀愛にまで發展し行かぬので

あると考へ得る場合もありませうが、併しまた此の如き事情によれる性交結婚等の障礙なき場合にても戀愛とならない異性間の愛があることは事實でありませう。

しかし異性であるといふ事は、性交欲を催起するの機會を有するものでありますから、單なる友情を以て交つてをります間にも自然に肉交に對する欲求を感ずることもあるのでありませう。此の如きものを以て、やゝもすれば戀愛なりと思ふものもあるやうでありますが、その性交欲が只漠然たる一般のものである間は、まことの戀愛とはいふことが出来ぬと思ひます。私は之を名けて、擬似戀愛とでも申したいと思ひます。エレン・カイ女史は『戀愛と結婚』に於て戀愛は友情と性交欲との化合せるものというてをりますけれども、そのいふ所の性交欲は一般のものでないことは、その書を通讀せるものゝ認め得るところ

ろでありませう。

外より單に性交欲を刺激せるものに對して感ずる情は、戀愛ではありませぬ。
(肉交しつゝある間柄でありながら戀愛を感ぜざることさへあるといふ告白は
往々聞かざるゝ所であります)。勿論性交の結果として戀愛の生じ來ることも往
々あり、その理由も無いではないと思ひますが、概して論じますれば、性交は
戀愛の自然的結果として來るものでありませう。即ち戀愛は内より性交欲を開
發するものであるといふことが出來ると思ひます。シヨペンハウエルは『戀愛
は特殊化せられたる、個體化せられたる、性欲に過ぎず』と申してをりますが、
もし精確に申すならば、『戀愛が性欲を特殊化し、個體化するものである』とい
ふべきでありませう。

特殊化する力を、シヨペンハウエルは『生きんとする意志』の權化たる種族の

選擇力に歸してをりますが、エレン・カイ女史は之に加ふるに人格の自己完成力
を以てしました。これ所謂パーソナル・ラックなるものであることもすでに述べ
た通りであります。

併しながら、何れに致しましても、戀愛は只種族の欲望若しくは人格完成の
要求が、未だ對象を得ずして空しく憧がれつゝある状態ではありません。此の
如きは戀愛の目覺めなどいはるゝでありませうが、戀愛は其對象を得て後に感
ぜらるゝものでありませう。即ち特殊化せられ、個體化せられんことを要求す
る性欲ではなく、既に性欲が特殊化せられ、個體化せられたる後にあらはるゝ
心識であります。別語を以て申さば、そのおぼろげなる憧憬、あてなき散漫た
る欲求が、或個體によりて結晶せしめられ、具體化せられなければなりませぬ。
之を具體化せしむるものは、或個體に現はれたる對象でなければなりません。

私は此の對象を或個體に現はれたる異性美なりといはうと思ひます。

即ち戀愛とは或る異性美によりて開發せられ、賦彩せられたる愛なり。と定義したいと思ふのであります。

美と戀愛

美と戀愛との本質的關係につきましては、學者の間に異論のあることであるが、兩者の間に重要な關係の存することだけは否むことのできぬ事實と思ひます。

プラトーンの如く、戀愛を以て、善と美とをあれ求め、且つ之を創造せんとする要求なりといたしてをるものは申すまでもありませんし、またシヨベ

ンハウエルにいたしましても『性欲はいつでも美によりて導かれてをる。これなくば、性欲は嘔吐を催すべき要求と墮落する』といつてをるのでありますし、エミル・ルツカ氏はその名著『エロス』に於て、戀愛の發達を二期に分ち、その第一期の特色を、肉欲の満足並びに人體美に對する快感を主とするものとし、第二期の特色を、完全なる靈性の要素たる徳操、純潔、親切、知慧といふ如き精神美に對する憧憬においてをります。しかし戀愛の最も進歩せる第三期に於ては人格の靈肉一致を主として賢愚、善惡、美醜に係はるものではないといつてをりますが、人格の靈肉一致を主として、その究竟を情死に求めんとする如き戀愛が、自分をして美を感せしめざる異性によりて惹起さるゝであらうとは果して『心理的事實』でありませうか。第三期を説明するために掲げられたる實例(例へばワグネルの作など)に之を裏切るものが多いのはいふまでもありま

せんが、それは例證の偶然として看過することゝ致しましても、『第三期に於ては肉の快感と、精神的戀愛とが最早や分離せる要素として存在せず』といへる語の中には少くも異性美が第三期に於ける戀愛にも含まれてをることを暗示してをるといはねばなりません。

オット、ワイニゲルは、凡ての美は戀愛の要求によりて造られたるものなりと申してをります。私は寧ろ戀愛を惹き起す機縁として、美は主要なる地位を占めてをるものであると申したいと思ふのであります。少くも美は或る愛を惹き起す機縁であることは何人も經驗し得る事實であります。

美とは何ぞやと申すことは、美學上未決の問題であります。美なりと思ふものに對する時、少くもその瞬間に於て、我とその對象とは融化して渾然一如となるものであることは心理的事實であります。

何が爲に此の如き力を有するのでありませうか。これも大問題であります。が、私の考へを申しますれば、美とは、理想が具體的形像を取つて現前するのを感じた處に感ぜらるゝものであります。理想が具體化して現前するを感じました時に理想に對する憧憬追求の念が、一時満足せらるるものでありますから、そこに自分とその現象とが、融合渾一する如く感ずるのであります。

此の如き經驗によりて自他一體たる事實に目覺むる時、こゝに愛が生ずるのであると思ひます。

現前せる美が異性美である時、そこに感ぜらるゝ愛が即ち戀愛であると思ふのであります。

異性美とは何ぞや

美を以上の如く解釋するならば、異性美とは特に異性に對して有つてをる理想が具體化して現前せると覺した時に感ぜらるゝものであるといふべきであります。

特に異性に對して有つてをる欲求（を私は性欲と申したのであります）が、普通の用語例と異つてをりますから、暫く之を見合せまして、此の長い語を用ゐますが、此の欲求は次ぎの四つの要素に分けることが出来ると思ひます。

肉交欲——單なる生理的欲求……………陰陽
生殖欲——産子、育兒……………父母

補足欲——自己の完成……………夫妻

聖化欲——異性に神を求むる性……………男女

此等の中、肉交欲と生殖欲とは通常、性交欲といふ名によつて一つにせられてをるやうでありますし、また肉交は生殖を目的として始めて存在し得るともいはるべきものであります。現在の心理的事實では、兩者は離れて存在してをるものなることは前掲ルツカの説ばかりではなく、多くの性研究家の殆んど一致せる所であります。また性交欲と補足欲とは前掲田中王堂氏の説にもあります通りに、相離れたものではないのであります。經驗的事實としては、分れて存在し得ることは、靈肉一致、人格完成、を主張する論者のあることにも明かでありませう。

殊に聖化欲といふものを立てましたことは、或は異様に感ぜらるゝ方がある

でありませう。補足欲と共に人格完成といふ名の下に攝することが出来ること
恰かも性交欲といふ名の下に肉交生殖の兩欲をまとめることが出来ると同じや
うだともいはれぬでもないのではありませんが。しかし仔細に考へますれば補足欲
と聖化欲とは區別せねばならぬものゝやうに存せられます。

補足欲と申します時、ワイニンゲルが先人未發の試みとして掲げたる性的牽
引の法則にいたしましたも、またリップスやカーペンターや、前掲のエレン・カ
イ女史の相互的補完にいたしましたも、また若しくは『婦人の愛によれる男子
の靈魂の淨化救済』といふ信仰にいたしましたも、補足によりて自我を完成せ
んとするものであつて、自我といふことに重きをおいてをるのでありますが、
人間の心にはまた自我完成の要求を離れて異性に於て神を見んとする止み難き
要望の存することを私は信じたいと思ふのであります。之を假りに名づけて聖

化欲と申したのであります。

此の聖化欲は或る學者によりて論せらるゝ如く、自己の缺點の餘りに著るし
く、自から如何ともすること能はざる場合に、その缺點を救ふに足るやうな品
性を備へてをる異性を發見したる時にあらはるゝこともありませう（例へばゲ
ーテの如き場合）、また多くの場合には精神的戀愛を感せる者が、その戀愛の酬
いられざる時、之を神聖化する場合（例へばダンテの如きこと）もありませう
し、また後段、貞操につきて述ぶる所に申上ぐる積りではありますが、純真なる
戀愛の經驗を投射して、之を對者に具體化せしむる時にも起ることもありませ
うが、それ等は寧ろ發現の機縁でありまして、それ等の機縁によりて發現する
聖化欲はそれ等とは異なるものとして區別することが出来るやうに思ひます。
即ち、自我の完成といふ目的を必ずしも有せざる場合にも、單に異性として完

全なる品位を具體化せるもの、顯現(即ち異性神)を希望する要求の存することがあるのであります。異性としての完全なる品性とは畢竟するに前述の性交、補足、兩欲を満足せしむるものに外ならずと見るべきか、或はそれ以外に存すべきか、自から問題でありませうが、然しながら心的經驗に於ては、それ等の欲求とは異なる要求、即ち異性に於て神を見んとするの要求即ち異性を神聖化せんとする要求の存することを認めざるを得ぬやうに思ふのであります。

古代に於ては男性の神と等しく、女性の神が殆んど凡ての人種民族によりて崇拜せられたといふのはこの聖化欲の發現でありませう。ハンネー氏はその著『宗教に於ける性的表徴』に於て、創世紀の第一章第二節に『神の靈、水の面を覆ひたりき』とある、その神の靈といふ語は、もと女性を意味せるものであるといひて、言語學の上より之を論せられてをります。其後猶太教の發達の途

に於て、女神は悉く除外せらるゝやうになり、基督教またその遺風を傳へたのであります。人間自然の至情は遂に制しきることが出来ずして、(一)にマリヤ崇拜を現出するに至つたのは何人も知る通りであります。

神といへば性を超越するのであります。しかしいづれかと申せば男性的であります。女神といへば何となく目立つやうに感せられますのは、男子本位の文化の影響であると思ひます。ワイニングルなどは勿論ですが、エミル・ルツカなど、僧院の尼衆などには、男僧の『マリヤ崇拜』に比すべき精神的現象なしと申してをります。これが歴史上の事實といたしますれば、これは即ち男子本位の因襲的感化によるものでありませう。女子が因襲より解放せられ、新しき教養に修練されて、自性本來の要求を發表するやうになりましたならば、肉感より解脱せる『クリスト崇拜』も必ず聞くことが出来るであります。教養

ある婦人の結婚問題にたづさはりて、女性がその夫として選ぶべき男性に對する要求を仔細に分析してまゐりますとき、その中には性交欲、補足欲の外に、異性に神を求めつゝある要求の、無意識ではありますが、可なり強く活らきつゝあるのを發見せる經驗を私は一再ならず有してをるのであります。

此の如き次第でありますから、異性に對する要求としては、上掲四つを數へたいと思ふのであります。そして此の要求は心理的經驗としては、相分れて活らきつゝありといふことが出來ますが、それは只著るゝ活らく方面よりして分析したるまでとあつて、其實、分離して獨立的に存在してをるものでないことはいふまでもありません。四つのもは同一體の四面といふべきものであつて、時により處により人により、或る方面が著るしく活らき、他の方面がしばらくその影を潜めるのであります。すべての要求が調和して満足せしめらるゝ

時、異性に對する要求は最も圓滿に満足せられ、調和・諧暢の心境がこゝに開くのであります。

そして此等の要求を満足せしむべき理想的對象として現はれたのが即ち異性美であると私は思ひます。

異性美の問題に關しては、ウエスタマーク氏はその名著『人間結婚史』に於て詳論してをられますし、またハベロツク・エリス氏も其大著『性の心理研究』の第三卷及び第四卷、殊にその第四卷の全部を、此問題に捧げてをられます。尤もウエスタマーク氏は美感と戀愛とはその本質を異にするものであるとせられてをりますし、またエリス氏は戀愛を以て肉的高潮の刺激に對する應現であるとし、美は要するにその刺激の複成に過ぎずといふ見解に立たれてをるやうでありますから、結論に於ては私はなほ飽き足らぬやうに感じてをります。

併し何と申しましても、斯研究の典據でありまして、私の此問題に關する論據の資料は……として此兩大家に仰いでをるのであります。

さて異性美として人の認めつゝあるものは、變遷に變遷を重ね、交錯に交錯を重ねて來てをるのでありますから、極めて複雑なるものであります。概括いたしますれば、月並的であつてもやはり、形體美と精神美とを本質的要素としてをるものであると申すべきでありませう。そして形體美とは要するに健康に關する理想の光現であり、精神美とは、人格に對する理想の光現ともいふべきものであります。健康にしても、人格にしても、單に人間として見たる時のものをも含むことは勿論であります。殊に異性に對する要求、そしてその理想的現象としての美といふ點より見ます時は、それが男である場合に於ては男であると共に、また、夫であり、父であり、女である場合に於ては、それが女

であると共に、妻であり、母であるとしての健康の光であり、人格の光であるべきであります。惟ふにゲーテの『永遠の女性』(若しくは『永遠の男性』)など申しますのもつまりは此二つの要素の結成に外ならぬことと思ひます。

但し、人の理想は凡て時と處と人によりて、それぞれ異なり、またたえず進歩發達しつゝあるものでありますから、内容は一定することが出來ぬと思ひます。

即ち健康美に致しましても、風土の關係によりてその相を異にしてをります。熱帶地方、溫帶地方、寒帶地方といふ區別だけでも、それ〴〵異なるは明かなることでありませう。即ち人種や、民族によりて美とする所を異にし、而して民族の特徴を著るしく現はしてをるものを美と致してをる所以でありませう。また人格美にいたしましても、社會組織の關係からして、要求せらるゝ精神

作用の相がそれ／＼かはつてまゐります。例へば家族制を文化の基礎とする支那の如き社會におきましては、家族組織維持に必要な精神作用が重きをおかれ、忠よりも寧ろ孝を重んじ、婦人には一婦二夫に見えず、七從三去等を以て冠徳としてをります。故に孝養のためには自分の子を殺し、老親を慰むるためには女子でありながら男装せるものや、壯年に達しながら小供の如き態度をなすものを以て精神美を發揮せるものと稱讚してをるのであります。

異性美なるものは、健康の光と人格の光とを本質といたしてをりますが、また個人特殊の要求若しくは、嗜好によりて種々に變化を受けてをることも見のがすべきではありません。此の個人的要素にも、前に申しました補足欲の要求より來れるものと思はるゝものもあります。シヨベンハウエル等は此點に於て可なり詳しく述べてをるのであります。ベーンの所謂 charm of disparity (異

質相補の嬌味)の現象でありますが、(また之に對して似た者夫婦など申します如く、嗜味、傾向を同じうすることより相求め相引くこともありませう。レオナルド・ダ・ヴィンチの指摘したといはるる所謂 Parity 同氣相求の現象もありません。これは愛を惹起す機縁とはなりますが必ずしも異性美の要素となり得とも限らぬかと思ひます。)何れにしてもこれらは自然の要求より出でたるものでありませう。而してまた奇矯的な好みより出でて、殊に變つたものを愛好するが如きこともあります。これは平凡に飽きて、變化を好むの自然の性情より、出づることもありませうが、また變態的現象も尠くないと思ひます。何れにいたしましてもこれ等もまた、異性美を形づくる一要素であるのは事實と思ひます。

また異性美を形づくりつゝある要素の中には、模倣的とでも名づくべきもの

存することも認めねばなりません。それは或る人格が偶然有つてをりました、或は現はしてをります形體若しくは精神の作用を美なりと感ずることでありま
す。即ち身神の健康の顯彰に必然的に關係のないものであつても、或る形體を
美なりと感ずることがあります。尤もこれらの中には、肉交欲満足を暗示する
如き形體のあらはれもあるとのことでありますが、しかしそれ等にも何等の關
係がありさうにも思はれぬもの、例へば或眼の形、顔の形、髪の色、などを美
と感ずることがあります。是等の多くは均齊とか、調和とかいふ普通の形式美
の範圍内に屬すべきを常といたしますが、必ずしもさうでないものもあるので
ありますのは、所謂流行の變遷などを見ても明かなることと思ひます。此の
如きは或形體美若しくは精神美を具へてる人が偶然所有せるものであるので、
畢竟するに健康若しくは人格の光の反映賦彩と見るべきものでありませう。

異性美と性交欲

異性美を以て、異性に對する欲求を満足せしむべき理想的現象と見、そして
異性に對する欲求の一つに肉交欲をも數へます以上、單に異性といふことそれ
だけでも、美の一要素となることが出来る筈です。現に美術なるものは、生殖
器に特殊の注意を惹かしめんがための企てにその起原を有すと論ずる學者もあ
るのであります。サンタヤーナ氏は、それほどまでに説いてをる學者ではあり
ませんが、その『美感論』に於て次ぎのやうに述べてをります。

『吾等の美感の情的方面は——それがなければ、美感は、美的といふよ
りは寧ろ、知覺的、數學的となるであらうが——此情的方面の全部は、吾

等の性的組織が何處ともなき遠い所に於て動かされる所から生ずるのである。』

『故に男に取りて最も愛らしく感ぜらるゝものは女であり、そして女に取りて最も興味あるものは、——女のつゝましやかさが之を告白するならば——男であるといふことを知るのである。』

しかし異性は異性に取りて最も興味あるものなることは、事實であるとしても、只異性なるが故に、それが即ち美であるといふことは出来ぬのが常であります。これにつきては、サンタヤーナ氏はまた次ぎの如く申されてをります。

『美は畢竟快感に外ならずとしても、それが客観化せられなければならぬ。そして快感が遠ければ遠いほど、複雑なれば複雑なるほど、もつれてをればもつれてをるほど、一しほ客観的に見えるものである。そして二つの快

感が合同すれば一つの美を作ること屢々あるのである。』

『若し我等が或芳香を一つのフラスコの中に入れて持つてをつても、何人も是れを美と呼ぼうと思はぬであらう。それは餘りに切り離されたる一つの感覚を興ふるのであつて、結びつくべき他のものがないからである。しかし、その芳香を花園より浮動させて來るときは、その芳香はそれと同時に認められたるいろ／＼の物にも、一種の嬌趣を興へて、それ等を美と認めしむるに至るものである。』

要するに分析して申しますれば、異性美を組織する要素の一として肉交欲満足の理想的対象を數ふるのでありますが、具體的対象たる以上、たゞ單に肉交欲満足だけの対象といふものはありません。それが一個の具體的異性ならば、身體精神を備へてをる筈でありますから、肉交欲満足といふことが、形體精神

の美醜によりて影響を與へらるゝことは申すまでもありません。西妃の観みを
だけ模倣せる女は、女であつても他の點に於て美の要素を缺けば醜といはねば
ならず西妃に於て美なるものが、却つて一層の醜を増すといふこともあるであ
りませう。異性美を以て、異性に對する欲求を満起せしむべき對象に、理想的
といふ形容詞を冠せました所以はこゝにあるのであります。

然らば、肉交欲が、異性に對する欲求の他の要素に關するの地位は之を如何
に見べきでありますか。此の要素を異性美といふ概念の中より除外せんとす
る學者もあるやうであります。此欲求の満足を何等かの形式に於て假定する
にあらずば、戀愛は果して感ぜらるゝか否かは問題であります。勿論、畫像や
彫像に對して戀愛を感じた例も(八重垣姫の如き)尠くはありませんし、また過
去の人、例せば基督に對して戀愛を感じたる中世紀の尼僧の場合の如き著るし

きものがあるのであります。それ等の感情の中には肉交欲が變装して存在し
てゐることは、既に證明せられてをり、露骨には肉交の行爲をさへ試みたもの
ゝあることは、かの希臘のピクマリオン以來、所謂彫像姦、畫像戀愛として
いくらかも東西今古の記録に存してゐるのであります。

倉田氏はフラ・アンゼリコの描ける天使の像に對して、性的悅樂を感ぜられた
『しかしその悅樂は性欲(肉交欲)を除去することによりては得られないもので、
只情欲を高め、淨めることによつてのみ達せられる悅樂である。そこにはもは
や肉慾等なく、只靜かなる美のみが支配する。しかしその美は一種の美であつ
ても、性欲が排除されてゐるならば、我々を性的に喜ばせることは出來ない。
その靜かなる美の中に我々を性的に樂ませる微妙な密があつて、我々の性に對
する慾望を飽和せしめるからである。』といはれてをりますが、異性美の中に於

ける肉交欲の地位をよく示してをらるゝものと思ひます。

しかしその性欲(肉交欲)が高められ、淨められ、理想化せらるゝといふことは如何にして得らるゝのでありませうか、これは畢竟、その対象を單に肉交欲満足の方面よりして見ず、之を形體美、精神美、の方より見來るといふことに外ならぬではありませんまいか。しかしながら、それに性的悦樂を感ずるといふのは、それを單に人として見ず、寧ろ人として見たる上に更に異性として見たのであつて、私の所謂生殖欲、補足欲、又聖化欲の満足を感じることからでありませまいか。私はかくの如く解釋することによりて、異性に對する四種欲求の相互關係は明かなると思ひます。倉田氏の所謂天的なる戀愛の中に支配してをる靜かなる美とは異性に對する四種の欲求を満足せしむべき理想的対象を得た時に感ぜらるゝものであつて、私の所謂異性美は是に外ならぬと思ひます。

然らば『天的戀愛の中に含まるゝ忘我的なる樂は戀愛の低き階段に於て男女が肉交の絶頂に於て感ずる蠱惑的快樂に比して決して劣れるものではなく、むしろ遙かに恍惚たる甘美である』といはれたる、その甘美は何れより來るのであるか、私は之は異性美によりて惹起されたる自他一體感に外ならぬと思ひます。

戀愛開發の機縁

戀愛は私の見解によりますれば、異性美によりて開發せられ、賦彩せられたる愛であります。即ち異性美によりて入る自他一體感が肝心の第一要件であるのでありますが、その自他一體感の開發せらるゝ趣きは、必ずしも一樣ではありません假りに二つに分けて見ますと、

(一)長時間の交際接觸によりて開發せらるゝこと。がその一つであります。即ち一方に愛もなく、時には反感をさへ有して、結婚した場合であつても、(若しくは賣姪婦の如く單に肉交だけに止まる場合であつても)交際をつゞけてをる間に、對者の異性美を發見することによりて戀愛となることもあります。尾崎紅葉氏の『拈華微笑』に見るが如き場合もあり得ることでありませう。

また單に友人としての愛を以て、交際せる男女が、始めは趣味や信仰や職業や教養やまたは氣質等に關する一致よりして、自他一體感を抱きつゝあるに過ぎぬ間柄であつても、おひ／＼對者の異性美にも觸れることによりて、戀愛が開發し來ることがあります。前にも述べました通り、異性なるが故に只漠然とした性交欲を催せられたるだけにては、未だ戀愛とはいふには足らぬのであります。かゝる友人としての間柄には、異性美の認めらるゝ機會は甚だ多い

のでありますから、異性間の友愛は、戀愛にまで發展することは、容易であるのは事實であります。

また單に友人としてだけでなく、尊敬、信仰の對象として長く交際してをる場合には、敬愛の結果として有意識的、無意識的にその對象と一體たることを、具現しつゝある間に、私が前に申しました自動的機縁によりて、一層自他一體感を切實ならしめ行く間に、それが異性なる場合に、その異性美に觸れて戀愛となり來ることもあるのであります。例せば耶蘇に對するマリヤの場合の如く現實の人に起ることもありますが、尊敬、信仰の對象は理想上の人格たることが多いので、従ひて過去の想念上の人格に對しても感ぜらるゝことが少くありません。歐洲中世紀の『キリストの花嫁』と申すが如き場合はこれでありませう。かの有名なる『基督の模範』といふ書は此のキリストに對する戀愛に外ならぬ

と論ずる者もあります。變態的になりたる現象は歐洲中世紀の尼僧に實例が少くありません。又かの『マリヤの崇拜』は男子よりせる著るしき實例でありませう。

以上の如く戀愛は長時間の交際によりて開發せらるゝ場合も尠くありませんが、また

(二)一瞬間に電光石火の如くに開發せらるゝこと。も尠くありません。

かの一時の垣間見に百年の命を惜まじといふが如きは、即ちこれでありませう。泉鏡花君の小説にかゝる戀愛を取扱はれたものが多いやうであります『外科室』とか、『千鳥川』とか、また近頃の『立山唄心中』などはそれでありませうが、いつか鏡花君に會見した時、眞の戀愛は寧ろかくの如き電光石火の間に出るものでなからうとか言はれてをりました。

佛教經典の中には、囚はれて行く罪人を、樓上より跳めてをつた婦人が戀愛を感じて遂に之と結婚し、悲惨なる一生を送り、遂に救はれたといふ面白い話があるようですが、これは決して全くの作り話ではないといふことは、此頃英國の一女教師が監獄を參觀し、一囚人を見て戀愛に陥つたといふ實話によりても證せらるゝことであります。

かのイヴセンの『海の夫人』にあるエリダが最後の幕に於ける心の一轉機は夫、ソングルより解放せられ、自由と責任とを興へられたるところにあると、評者も思ひ、著者も説いてをるやうであります。その夫の寛大なる精神美に打たれたる結果であるとも解することが出来ると思ひます。

これはいづれにいたしても、戀愛はかゝる不圖とした瞬間の機縁によりて開發せらるゝこともあり、また長時間の交際によりて開發せらるゝこともあるの

であります。それを開發する力となり、方便となつたものは主として異性美であつて、その美によりて諧和齊調、渾然融化、そのものと自他一體たるの靈的經驗を得るのであります。既に自と他との一體たることを經驗するのでありますから、我といふ方面から見れば、我が有限なる繫縛を脱して無限の狀態に入り、一切他と一體たるの靈的體驗をもなすのであります。故に戀愛が純真なる時は、一跳直入、大悟の聖境に同じき趣きがあるのであります。ダンテはその『新生』に於て次ぎのやうに申してをります。

90

『私はビヤトリチエが、こちらに歩み來り、會釋してくれるに相違ないと思ふた時に、此世界には敵といふものが影をひそめたやうに見える。胸中同胞の愛の火にみだされて、縦しや其時私に如何なる失禮を加ふる人があつてもそれを恕すことが出来るやうに思はれた。また、その時に何人が私

に布施を請ふともその人に對して、わが愛するものよといふたであらう。

そしてわが顔は謙遜に充ち満ちたであらう。』

此れは釋尊が、菩提樹下に端座し、曉の明星を見て大悟徹底せられた時の光景に似てをると申すべきであります。そしてダンテは『かゝる愛情は凡ての婦人皆之を鼓吹し得ることが得るものではない、只特に貴き性格を有せる婦人のみである。』と或る詩の中に申してをるのであります。貴き性格を有する婦人即ち異性美であります。

91

戀愛の具體的顯彰

戀愛は以上述べました通り異性美によりて開發せられたる愛であります。

その愛はまたそれによりて賦彩せられるのは自然の勢であります。故に愛の本質に従ひて、その自他一體たる事實を具體的に顯彰するに當つても、また、他の愛の現象とは異なる種々の特色があります。

前に愛の本質を述べました所に、その具體的顯彰の無意識的なるものを説きて、握手接吻をなし、同棲を欲し、偕老同穴を契り、相愛する夫婦はその文字が相似、長命なる時はその容貌までも相似るに至るものであることなどを數へましたが、また性交や、育兒や、その他剛柔、相補ひ、唱和なほ相敬するなど何れも、肉交欲や、生殖欲や、補足欲、また時としては聖化欲に彩られてをる愛の自然的具現であるといふことが出來ませう。

しかし具體的顯彰が有意識的になりますと、その發現は一層特殊的になつてまゐります。愛の具體的顯彰とは、前にも申しました通り、自他一體たる靈

愛の具現

的事實を、自己の身體精神を通じて他に對してあらはすのであります。他と申しましても分量上の差と性質上の別とによつて、種々にあらはれも異なります。○戀愛の場合に於ては對者が單數なるを常といたしますが、同時に複數なることもあり得ると思ひます。また對者が自分と同じやうに、愛を有してをる場合と然らざる場合とがありますが、對者が自分と同じやうに、愛を有してをる間に於ける具體的顯彰は融通無碍。如何なることをしても、何のさほりもなく或は切られても痛くはなく、痛みはあつてもその趣きは異なるかとも思はれます。此の如き間柄にありましては、一旦緩急あれば互に自分の身神を犠牲に供することを厭はぬは申すまでもありません。

もしまた自分のみが愛を感じてをつて、他が未だ自分に對して愛を感ぜざる場合には、自分は己れのすべてをその對者のために犠牲にすることさへ敢へて

辭せぬを常としてをるものであります。

しかしながら愛の具體的顯彰は身體精神を通すのでありますが、人間の身體精神は如何なる大覺聖者に於ても完全なることを得ぬのであります。身體精神が不完全である上に、大概の人間には我執といふものがあり、また長い間の我執の薰習があるのでありますから、愛のあらはれ方も従つて十分なることを得ません。愛は本來自然に具體的顯彰を要求するものでありまして、その不十分なる場合には十分ならんことを要求するのであります。愛は前にも述べました如く、萬有一體の事實に根柢を有するものでありますから、一たび目覺めましたその要求は是非とも満足されねばならぬといふ絶對無上の強迫性を帯びてまゐります。かくして本來は自然の要求でありましたものが、變じて當爲の要求となつてまゐります。道德的意識の起原はこゝにあると思ひますが、戀愛の場

合におきましても、身神の不完全や、我執の障礙によりて種々なる現象を呈し、性的道德なるものも、かくしてあらはれてまゐるのであります。

性的道德

此問題に關しては論すべきこと甚だ多いと思ひますが、今は成るべく簡單に私の所見を申上ぐることにいたします。

まづ戀愛を靈的體驗の上より考へますと、愛の本質より來る要求として少より多に進んで行く傾向を有つてをるのであるから、所謂自由戀愛 (Free Love) 又は同時戀愛 (Simultaneous Love) なども存立し得ることとあります。只こゝに注意すべきは、一より他に及ぼしゆく場合に前者に對する戀愛を失ひ去るとい

ふが如きであつてはいけません。不完全なる人間である限り多少の厚薄消長はさけ難いとしても、前者に對する戀愛が全く滅び去るやうであつては、それは所謂移り氣であつて、愛の本質にそむくものであるといはねばなりません。もし此の愛の本質にそむかぬ限りは、愛の擴大し行くは寧ろ自然の要求であつて罪惡視すべきものではないと思ひます。もし罪惡といはるゝことがあらば、それが肉交にまで具體化する時でありませう。靈的經驗に止まる限りは、寧ろ當然のことゝもいはるべきものがあると思ひます。

併しながら普通の人情の上より見ますれば、戀愛には獨占的傾向が著るしいことは事實であります。人に聞かれて何等差支なき話でさへ、成るべくは只二人だけにてといふ思ひは普通の經驗でありませう。『世の中にをとこをみなは、あまたあれど、くしきは戀の心なりけり』といふも戀にある人の何人も感を同

じうする所でありませう。さきに述べましたプラトーンの『饗宴』篇におけるアリストファネスの寓話などもこゝに根據を有するのであつて、戀愛は一生に於て只一度あり得るのみといふ思想なども、此實感より出で來たものとも思はるゝのでありますが、私はこれは個我の執着に最も深き根柢を有するものと思ふのであります。

嫉妬は此の個我の執着の著るく發動いたしましたものであらうと思ひます。即ち自己の所有欲が傷けられたるが故であります。しかし嫉妬が多くの場合に於て、甚だ強烈なる性を帯んでをりますのは、我執に根ざす所有欲毀損に附加へて、寧ろその奥に更に深き根柢を有つてをるからであります。私はそれは愛する者、即ち自分と一體たりと感じてをるものが、切り離れ行くのでありますから、自分の體が斬らるゝと同様なる痛みを感じる所に存すると思ひます。

またかのヲカヤキと申すものは、異性の美はしき場合に感せらるゝのが常であります。これは單に他に對する羨ましさのみではなく、異性美によりて、かすかながらも覺えたる自他一體感が満足せられざるが故であります。此の如きおぼろげなる自他一體感さへ可なりの強烈さを以てをるのでありますから、況んや異性美によりて覺醒せしめられたる明かなる自他一體感の毀傷に加ふるに、我執より出でたる獨占的所有欲の損害を以てするのでありますから、切り取り奪ひ行く敵に對しては勿論、遂には離れ行く者に對しても『可愛さ餘つて憎さが百倍』となり、嫉妬の怨念はやさしき顔をも鬼の如くに變せしめ、或はその身を蛇形に化せしめ、呪ひのほむらは、身をも家をも國をも焼きつくさしむる許りに至るのであります。

貞操の二相四面

此の場合に於て貞操といふことにつきて、少しく申上げて見たいと思ひます。貞操は主としては婦人の徳となつてをるのであります。殊にその字義は婦人のみに限らるゝを通常と致してをりますが、之を婦人にのみ限るのはある特殊なる社會組織の現象であります。社會學的考察に關することは之を略し、今は男女に共通せる性的道德として見るに止めて、所見を申上ぐることにいたします。

貞操を以て男女共通の性的道德といたしますれば、それは即ち愛の當爲の要求であります。そのあらはれには二つの方面があるといふことが出來ると思

ひます。その一つは他人の我執に對して働く場合でありまして、之を消極的の相を取るとも名づけませう。他の一つは自己の我執に對して働く場合でありまして、積極的の相を取つてをるともいふことが出来ませう。

前段申述べました如き戀愛生活に於ける我執の活らきに對して遠慮し、斟酌し、愛の廣化的自然性を自ら抑へんとするが如きは、通常貞操の徳として要求せらるゝものでありますが、これは畢竟、相愛者の我執に對する思ひやりに出づるものであつて、愛の具體的顯彰の一變態に外ならぬのであります。戀愛の作用の上よりは寧ろ消極的のものといふべきであります。

併しながら、此の如き貞操は心内のことであつて、『忍びて色に出さず』また言動にあらはさざる以上は、如何ともすること能はざるものであり、従ひて是非すべき限りでないともいはるゝのであります。故に通常貞操と申します時は

肉交に關してあります。

●肉交は戀愛の具體的顯彰のうち最も特殊のものであります。戀愛なき性交はあり得ますけれども、性交を伴はぬ戀愛は甚だ物足らぬやうに感ぜらるゝものでありまして、性交を以て戀愛の極印とさへ思つてをるものもある位であります。故に相愛者の一方が他の者に對して性交の關係を結ぶ時は、之を以て直ちに自己戀愛の破滅と感ずるも無理ならぬことと思ひます。蓄妾多妻の是認せらるゝ場合におきまして、妻妾間の嫉妬は通例であります。認定せられたる以外の者との間に結ばれたる内密なる性交關係は、かゝる社會に於ても、妻妾達には痛烈なるなやみを與ふるを常といたしてをります。性交欲の満足を戀愛の自然の具體的現象と見、また戀愛の廣化的自然性を認めます時には、性交の廣化をも必ずしも咎むるに及ばぬことともいはるべきであります。が、他の子

孫繼續等の理由によりて許されると、または、血統の混亂等の理由によりて禁せらるゝとに係らず、概して肉交に局限を與へ、之れを以て貞操となす所以の根據は、前述の貞操と同様、一定の對者の惱みに對する愛の思ひやりに存するものと思ふのであります。

但し肉交欲の満足は戀愛の自然的顯彰の一つでありますから、肉交を行ひ、同棲を繼續すること能はざる時、心に淋しさと不満足とを感すべきは自然のことでありませうが、しかしながら戀愛の靈的體驗の方面より見ます時は、肉交の如何は必ずしも問題でないと思ひます。渾然融化の自他一體感、それ自身に於て大なる満足があるものでありまして、倉田氏の所謂性交せずして性交せるにも劣らざる甘美を感じ得る所以であらうと思はれます。こゝがまた、杉森氏の『戀愛は過半主觀的だ。人は戀する瞬間に於て相手の過半を創造する』と

いふ創造説や、有島氏の『愛は自己への獲得である。愛は惜しみなく奪ふものだ。愛せられるものは奪はれてはゐるが、不思議なことには何物も奪はれてはゐない』といふ擴張説の出で来る所以であらうと思ひます。

要するに戀愛の靈的體驗に於ては、それ自身に於て充足・飽滿を感ずるのであります。相手が自然に肉交を容るすならば、所謂性交にまで發達するでありません。しかしながら肉交の機會や、その見込みがないならば、具體的顯彰は別な形ちを取るものであります。ダンテの『新生』や『聖曲』は即ちそれであるといはれてあります。『ホイットマンも嘗てその可憐な即興詩の中に「自分は嘗て愛した。その愛は酬いられなかつた。私の愛は無益に終つたらうか。否。私はそれによつて詩を生んだ」と歌つてゐる』のであります。その他戀愛の具體的顯彰を、學問に、事業に選んだ實例は可なりに澤山あるのであります。

此點より考へて参りますれば、所謂失戀なるものは無いと思ひます。相愛したる相手が心を他に移したと思つた時、若しくは餘儀なき事情によりて、他人と結婚するやうになつた時、失戀の惱みを感じるとはよくいはれることでもあります。それは寧ろ失望と申すべきもので、失戀と申すべきものではないと思ひます。そんなことにて失はるゝならば、それは初めから戀愛ではなかつたので、一つの性交欲に過ぎなかつたのだといふべきであらうと思ひます。失戀なるものがあるならば、それは他より起るのではなくして、自分より起るものでせう。自分がある異性に對して有してをつた戀愛が、何等かの事情によりて(例せば隠れたる醜の發見によりて)消え失せた場合などをいふべきでありませう。しかしかゝる場合に於ても一たび本當に靈的に經驗した自他一體感ならば決して消え失すべきものではないのであります。太陽は一時黒雲に蔽はれまし

ても、消え失せたのではなく、いかに暗くても晝は夜とは異なる如く、一たび靈的に經驗したる戀愛の光は何處となしに、ある賦彩を凡ての上に與へてをるのであります。從ひて具體的顯彰も種々なる形を取つて來るのであります。かういふ次第でありますから、戀愛は靈的經驗より見ますればそれ自身に於て満足いたしてをるのであります。必ずしも肉交に執着することもなく、肉交が他になやみを惹き起す種子となることを感ずる場合には、自から之を抑制し、若しくは廣化して行く愛の具體的顯彰の或る形式を差控ゆるが如きは、愛の當爲の要求でありまして、之を貞操と稱するをつねとするのであります。前にも申しました如く、之等は寧ろ愛の廣化に對する消極的のあらはれであります。併しながら貞操にはまた、愛の深化に對する積極的のあらはれも存することを認めねばなりません。前者は他人の我執に對する斟酌でありましたが、

後者は自分の我執に對する督勵とでも申すべきでありませう。なほこのことにつきて少しく申述べて見たいと思ひます。

精しく申せば、やはり二つに別けることが出来ると思ひます。その一つは、前にも申した通り、異性美によりて自他一體を感ずることが純眞であり、深刻であるならば、一跳直入、大悟の聖境に等しきものがあるのですが、此の經驗に於て人は一切他と一體たるを感じ、盡十方無礙光の中に、同化し去るのであります。しかしこの靈的體驗は瞬間的なを常といたすやうでありまして、此の體驗より再び平凡なる常人に歸りました時、その體驗を投射してその體驗を惹き起すに至らしめたる對象に結びつきます。此の時その異性は、美化し、聖化し、神と等しきものとなることと思ひます。異性に對する要求の一として掲げました聖化欲の對象が之を機縁としてあらはるゝといふことは

前にも申述べました所でありませんが、ダンテのピヤトリチエや、ゲーテの『永遠の女性』などこれでありませうか、己が夫を『所天』といひならはした起源は何處にあるかは存じませんが、妻よりして愛する夫に對する時此の如き實感の生ずることもないとは限りえぬと思ひます。此の如く感じ得たる愛者に對して、自からの思ひを淨くし、行を潔きよくせんとする心は、自然に生ずるものでありまして、汚れたる思ひや、行ひを抑制せんとする道德的要求を感ずるは、これまた一つの貞操と申すべきでありませう。

戀愛の對象に此の如き感をいなくことを得るのは、極めて稀有の場合でありませう。普通の經驗に於ては相愛者の一體感に止まるのでありませう。即ち緑の蓮葉の上に宿りました二つの清き朝露がコロ／＼と相寄りて、渾然たる一つの珠と融化せる如きは何人も覺ゆる戀愛に於いての經驗でありませうが、かゝ

る一體感でありまして、つねに清く、圓かにして、永くつゞくことはあり得ないのではありませんまいか。いろ／＼の執着の汚れに染むともありませんし、また種々の煩惱の風はこの一つの珠を破かうとするが如きこともないではありませんまい。これ等の障魔に對して自他一體感を維持し行かうとすることはこれまた一つの貞操といはねばなりませんまい。

戀愛をして性交欲や、單なる友情など、異なれる神祕を感せしめ、何ものかに向ひて無限のあこがれを覚えしむる所以のものは、此の渾然たる相愛者の自他一體感の圓現完成、及びそれを通じて洩れ來る無礙の靈光に對する敬仰崇拜の思ひではないでせうか、と私は思ふのであります。

以上述べましたやうに戀愛は靈的經驗の方面より見ますれば、靈的なるものゝみなるやうにも見えますけれども、異性美によりて彩どられつゝある愛であ

りますので、その具體的顯彰欲は前述の肉交欲も、生殖欲も、補足欲また聖化化欲も完全に満足せられんことを要求するものであります。此の要求に應じてあらはれたるものが、結婚と申す制度であります。これも一つの大問題であります、簡單に所見を申添へておきたいと思ひます。

結婚の意義

私は結婚を定義して戀愛の具體的顯彰を完からしめんがために、精神生活の程度に應じて建てられたる一つの社會的制度であると申してをります。故にその形式は決して一樣に限るべきではないと思ひますが、現今の精神生活の程度に於てはやはり、一夫一婦制が最も適當してをると信じてをります。

結婚は戀愛の具體的顯彰でありますから、戀愛を基礎とすべきは申すまでもありませんが、社會制度の一つでありますから、戀愛相思の間柄は必ず結婚せねばならぬと限るべきではないと思ひます。また戀愛を以上の如く解します限り、戀愛は結婚せざる間柄にも成り立ち得べきものであると同時に、また一たび戀愛によりて結婚せる者は、戀愛が消滅せりとの理由を以て、離婚すべきものでもないと思ひます。(勿論離婚を絶対に禁ずべしとするのではないことはいふまでもありません。結婚を成立せしむる事情が存在せぬやうになつた時は、離婚は許さるべきでありませうが、只單に戀愛が無くなつたからといふ理由によつては許されぬことゝ思ひます。)戀愛はその本質上消滅し得べきものでないからであります。是等は以上申し上げました所から、自然に出で來る結論でありますから、今は絮説を略しますが、なほ一言申上げて見たいと思ひますのは、

戀愛の人生における意義についてとあります。

結婚は戀愛の墓

『結婚は戀愛の墓なり』とはよくいはるゝことでもあります。これは厨川氏も辯解せられたる通り、

『結婚によりて物的基礎が確立すると共に、愛の内容はこゝに再び進化し、轉化して、複雑性を増し、更に一新境を開拓する、即ち最初の戀愛は、やがて夫婦間の相互扶助の精神となり、至高至大の情誼と變じ、更に進んで親としての兒女に對する愛情に向つても轉化して行く。更に進化と共に此の如き廣き愛の精神が擴大せられるに及んで、家族より更に隣人に及ぼし

おのが民族の全部に及び、社會に及び、世界人類に及ぶとき、吾々人間の完全なる道徳生活は茲に成る。愛のない所に道徳はない』

と申すべきでありまして、即ち結婚によりて、戀愛は生長し、發育し進化する筈であります。併しながら人間は肉體精神を離れて存すること能はず、従つてまた種々の執着に囚はれるものでありまして、結婚生活も理想的に進み行くこと能はざるを常といたします。然かのみならず、我執はしらずくの間賦彩影響して、偏狹固陋を當然と思ふに至らしむるものであります。

抑も戀愛は初めに申しました通り愛の一樣式でありまして、ほかの愛と同じ様に、一切他と一體たるの事實を顯彰せんことを究竟の要求といたしてをるものであります。然るにそれが結婚生活に伴ふ種々なる執着によりて局限せられ固陋になつてまゐりますと、戀愛はその根本の養源を杜絶せらるゝに至ります

わけで、戀愛それ自身も萎靡沮喪、遂には窒息死をなすにいたるものであります。結婚生活が往々戀愛の墓となるに至るのは、此の如き意味に於てであると思ひます。即ち結婚をいたした後、相思の情に於て別に變つた所があるやうにも思はなくとも、肚裡何となく無限の空虚を感じ、影の如き懊悶が胸底深きところにとよふてをる。只僅かに肉交の蠱惑によりて一時の憂悶を忘れ、或は子女の教育に餘儀なき望みを繋ぎて自ら慰め、或は宗教に歸依して救はれんことを求めんとするが如きことが、結婚生活に伴ひまするのは畢竟するに、結婚生活に伴ふ執着によりて、人心至切の要求たる愛の生命が杜絶せられたからであります。戀愛はその生命を失つた軀殼に過ぎないものとなつたのであります。宗教史に於て妻帯を禁じ、又は獨身主義が重んぜらるゝ傾向が現はれてまゐります。その理由は一にして足りませんが、此の結婚生活に伴ふ弊害によつ

て、宗教の究竟の目的であり、萬有一體感の達成と具現とに累を及ぼすに至ることも、重なる理由の一つであると思ひます。

然らば結婚生活は如何にしたらばよろしいものであるか

戀愛の聖化

結婚式は我國に於ては古來神前に於て舉行せられてまゐりました。基督教會の儀式にならひて、太神宮にて行はるゝやうにもなりましたし、また佛教に於ても佛前の婚禮といふことが漸々行はるゝやうになつてまゐつたやうであります。その發生的目的は何れにありましても、**理想的意義は、之を以て戀愛を聖化し、結婚生活を淨化せんとするにあるべきであらうと思ひます。即ち結婚式**

舉行の當時に於て、戀愛の具體化に伴ふべき執着の弊より淨められんことを祈願し、且つこのために相互に努力扶助せんことを誓ふのにあるべきであると思ひます。

更に要約して申しますれば、異性美によりて體驗せる自他一體感を、夫婦生活の中に具體化し、互に相扶助しその靈的體驗を淨くし、高くし、深くしつゝ、一切他と一體たる體驗を啓發し、その具現化に努力することでありませう。即ち夫婦一體となりて愛の具體的顯彰に勵み合ふことである。所謂天籟を琴瑟相和の妙音に調べ出で、以て人間至心の切望たる天國淨土開顯の基礎石を据えつくることであると思ふのであります。



予〇戀愛觀終

大正十二年三月二十日印
大正十二年三月廿五日發
行 刷



(錢拾八金價定)

著者	中桐確太郎
發行者	小西榮三郎 <small>東京市京橋區南八丁堀一丁目一番地 合資會社小西書店代表社員</small>
印刷者	田中末吉 <small>東京市牛込區早稻田區卷町三六二</small>
印刷所	早稻田印刷株式會社 <small>東京市京橋區南八丁堀一丁目一番地</small>
發行所	小西書店 <small>東京市京橋區南八丁堀一丁目一番地 電話二二〇三番 振替口座東京四〇〇番</small>

文藝哲學講座

第四輯以下續々刊行	第三輯	第二輯	第一輯
	中桐確太郎氏予の戀愛觀	石丸梧平氏道徳と藝術	石丸梧平氏開講の研究辭 小島茂雄氏サンタヤナ研究 田中王堂氏デモクラシイと哲人主義
	錢拾八金價定	錢拾五金價定	錢拾五金價定

文藝哲學研究會編纂
東京電話 橋前 小西書店
振替 東京四〇〇番

文藝哲學講座趣旨

- 一、本講座は學問の民衆化を目的と致します。
- 一、其の事業は恰も校舎なき不定期大學の如きものでありまして、其の講演は講座集として刊行致して居ります。
- 一、本講座は主として東京市に於て開講されて居りますが地方會員の希望ある場合には其の地方に開講する事もあります。
- 一、本會は公開の講座以外に更に會員のみの研究会懇談會を開いて居ります。
- 一、入會退會共に極めて自由であります、詳細は「東京市京橋區南八丁堀一ノ一文藝哲學研究會」宛に御問合せを願ひ上げます。

大谷大學教授 廣瀨南雄著 四六版最上製函入 三百七十頁最美本

親鸞教の本質

定價金貳圓貳拾錢
送料金拾七錢

最新刊好評

本書は親鸞流行時代に有意義の結論をなす可く其の殿り役として生れたものである。爾來、ヘブライ文學の愛好者として新舊聖書に造詣深き著者が、其の熾烈なる宗教的情熱と藝術的氣品とを「親鸞上人の宗教」に移植し、更に深遠なる研究の成果と、熱烈なる魂の叫びとを以て本書を色どる、斯界の先輩は本書を罵りて「新奇を好む異端冒瀆の書」となすも、一般の思想界は餓えたるものゝ食を求むるが如くに本書に集る……

發行所 東京京橋電話局前 小西書店 振替東京四〇〇三 電話京橋二二〇三

石丸梧平著

創作 受難の親鸞

(大好評大歡迎) 卅八版發賣

四六版三百二十頁 價貳圓拾錢
岡落葉裝幀 天金箱入莊重美本 送料拾錢

罪とは何ぞ、懺悔

とは何ぞ、科學の

洗禮を受けたる新

宗教、愛と藝術と

を基調とせる新道

徳の深刻なる描寫

内容

◆第一篇……叡山の動搖……◆第二篇……親鸞の結婚……
◆第三篇……信の世界……◆第四篇……附録論文 哲學の世界と
吉水の崩壊……◆第五篇……受難 藝術の世界と
叡山に於ける範疇(親鸞)の生活は、眞の人間生活に目ざめんとする血みど
るな悩みであつた。そしてとうとう山をおりた。そこには人間生活創造の
大きい喜びがあつた。愛人玉日が凡人生活の姿を更に大きくした。だが、
忽ちにして吉水教團が崩壊した。叡山の迫害は遂に親鸞を流人として北國
に送つた。「受難の親鸞」そこに更に深い體驗と宗教とが生れたのであ
る。愛は苦だ。愛するものがなければ別離も悲しみではない。だが、愛は
苦也として其煩悩を絶ち切れやうか。そこに更に深い悲痛がある。その生命
生活への無限の進展こそは人間の歩むべき道ではないか。それに徹すると
ころにこそ新宗教が生れる。「如何に生くべきか」著者は此創作に於て全勢
力を傾倒して居る。「味へば味ふほど親鸞は深い」さう云つて著者は親鸞の
痛苦と歡喜中に融け入つて居る。

發行所 東京京橋電話局前 小西書店 電話京橋二二〇三 振替東京四〇〇三

石丸梧平氏著 △玉村善之助氏裝幀

梧平 選集 お霜の若い頃

(第六版)

▽ 四六版三百十頁、清新美本箱入△
▽ 定價一圓六十錢、送料十錢△

著者が一切の舊い生活を捨て、あこがれて居た新しい藝術の國へ旅立つた當時の作
品中より代表的のものを選んでこの選集が生れた。何れも新しい生活の喜びに躍動し
つゝ執筆したもので、著者は「——その頃の眞剣な藝術的良心を永久に忘れないが爲
めに」本書を出版すると序文に述べて居る。

内 容
○お霜の若い頃 ○二人の女教師の生活 ○朝の家 ○佐吉の戀女房
○お霜と大和 ○彼女の年齢

東京東橋電話局前 合資會社 小西書店 電話東京四〇〇三番

島崎藤村先生推薦・藤澤清造氏著

長篇 小説 根津權現裏

高村光太郎先生題字
廣川松五郎畫伯裝幀
四六版 四百頁
定價 金二圓
送料 十七錢

島崎藤村先生曰く

性慾苦、病
苦、貧苦に
さいなまれ
たる青年の
深刻を極め
たる告白

梅は桃より早く咲き、桃は櫻より早く咲く。一切の花に遅れて
も冷い霜の中で咲きはじめる山茶花のやうなものもある。才能
は必らず顯はれると言つた人もあるが、私もそれを信ずる。唯
その才能が奈何なる時を選んで顯はれて來るだらうか。思ふに
一番よくその時を知るものは才能自身であらう。隠れたる作家
藤澤清造君のために。……………

發行所 東京々橋電話局前 合資會社 小西書店

電話東京四〇〇三番

荻原井泉水氏著 二

四六版三百三十頁
定價金貳圓二拾錢

函入美本
送料拾貳錢

俳壇十年

子規没後今日まで十餘年間の俳壇の目覺しき——新傾向運動と復古主義との動亂の中を、著者は靜に歩みつつ論議し且つ句作した、思索すると共に奮進し、批評家であると共に作家である著者の俳句藝術論、俳壇縱横觀、俳人月旦、諸家への公開狀、俳家訪問記、旅行記、芭蕉研究、一茶研究、初學者への俳話、雜感、折々の俳句等凡て五十四篇を此一冊に輯む、即ち現代俳句界の縮圖として新派と云はず舊派と云はず、俳句を味ふ方々の一讀を乞ひたい……

荻原井泉水氏著 二

三六版二百三十頁
定價金八拾錢

函入美本
送料六錢

新俳句評釋

俳句ほどデモクラチックな物はない、大臣も作る、子供も作る、然も大臣諸公の句より三尺の童子の作が勝れてるのは何故か、「まこと」があるからだ、俳句は芭蕉の云ふ如く「まこと」の文學だ、人間の心の奥底にある「まこと」を披瀝して親しみ合ふ道だ、俳句は小ひが、此世界は萬人をして自然の懷に遊ばしめる、此世界には誰でもはいれる、入る路は決して難くない、先づ此評釋本一冊を下貴が俳句に入る通券とせられよ……

振替東京東四〇〇番
電話東京橋二〇三

小西書店

東京市橋區
電話橋前

船場のぼんち (第一部)

四六版百七十頁
定價金八拾錢
送料内地六錢

惱ましき青春

東京時事新報子本書を評して曰く

石丸梧平氏著

社會の觀察に一隻眼を有する著者が勞作の第一卷本書を成すに當つて純粹の大阪人を採れるさへ珍らしきに況して其の土地に根強く滲込める大阪商人の徹底的な物質思想と生活との緊密な描き其の間に青春の戀に悩む一青年を點出し來つて讀者を惱殺し去る技術は是れ將に文壇に独自の地歩を占む可きの佳作である若し夫れ煤煙と女の都たる大阪特有の抒情味に至つては讀者の靈を奪ふに足れり……

青春の果て

船場のぼんち (第二部)

四六版二五〇頁
定價金壹圓廿錢
送料内地八錢

振替東京東四〇〇番
電話東京橋二〇三

小西書店

東京市橋區
電話橋前

大坪草二郎著・岡落葉裝幀

四六版最上製函入
清新美本百八十頁

戲曲
經典
と
劍

定價圓五十錢
送料金拾錢

好評六版

曠野に於ける拾有三年の忍従生活の後、天來の神祕的威力と宗教的體驗とを把握し得て、左手にコーランを捧げ、右手に劍を提げし起ちアラビヤ原頭に風雲を捲き起したる英雄的宗教家マホメットの面目さながら活けるが如く、更に此の稀代の宗教家に配するに、マホメットを刺さんとして妹アミナの殉教的精神に感動し翻然改宗したる勇士サメルと、恩義に感じて愛妻を教祖に捧けたる不可思議の人物ゼード等を以てし、豊富なる劇的色彩と飽く事なき藝術的感興とを以て全篇を掩ふ、眞に是れ類ひ稀れなる興味深き好著述なり……

▲發行所

東京京橋電話局前

振替東京四〇〇番
電話京橋二二〇三

小西書店

515
39

終